

第1回「3.11東日本大震災から高知は学ぶ」 シンポジウム

～震災時震災直後はどうだったのか、そこから今まで～

2012年2月4日（土）
高新文化ホール



公益社団法人 高知県自治研究センター

「3.11 東日本大震災から高知は学ぶ」 シンポジウム

開催の目的

2011年3月11日発生の東日本大震災は、私たちの想像をはるかに超え、一般市民が撮影した生々しい大津波の映像は瞬時に世界を駆け巡った。

そこに写った津波の瞬間、そして津波が去った悲劇の後には、将来必ず起こるといわれる南海、東南海地震に備えなければならない私たち高知県の未来そのもの。まさしく今回の震災は明日のわが身である。

であるなら私たち高知県民は、今回の震災そしてそこから復興に向かう東日本の人々や地域から、多くのことを学ばなければならないと思う。それがわずかでも犠牲者に報いることにも通じるのではないだろうか。

今回のシンポジウムでは、被災後の産業復興や、コミュニティ、自治体のあり方など、必ず震災に直面する高知県民としての心構えとそのための不断の地域づくりをどのようにすすめたらいいのかを考えたい。

**入場
無料**

開催日 2012年2月4日（土）13:00-17:00
開催会場 高新文化ホール
高知市本町3丁目2-15 Tel) 088-825-4321
対象者 地方自治体職員他一般県民（どなたでも）

テーマ 「震災時震災直後はどうだったのか、そこから今まで」



渡邊美恵子さん

震災当日釜石市内で被災し逃げ延び、更にこれまで数十日に渡り震災後の東北地域の産業復興の現場に足を運び、その実態をつぶさに見てきた明星大学 関満博教授から震災時の状況から、現在までの復興の状況をお聞きます。

更に、震災後すぐに気仙沼の自治体支援に入った黒潮町役場 友永氏からは被災直後の市役所職員の様子や被災地の状況から何を感じたのか、報告を受けます。また、宮城県岩沼市震災復興会議委員 渡邊氏からは実際に被災された住民の立場から、当時の状況やどのような視点で復興計画策定にとりくまれているか、報告していただきます。



関 満博さん



友永公生さん

主催 社団法人高知県自治研究センター TEL 088-822-6460

■関 満博（せき みつひろ）さん

1948年、富山県生まれ



成城大学経済学部卒業、経済学博士。一橋大学商学部教授。明星大学経済学部教授（一橋大学名誉教授）。

第34回エコノミスト賞、第19回サントリー学芸賞等、受賞歴多数
岩手県北上市「しらゆり大使」、東京都墨田区「産業振興専門員」、財団法人日本地域開発センター理事などの公職にもあり、ラジオ放送、新聞、経済誌など、マスコミ連載も多く手掛ける。
著書として、『地方圏の産業振興と中山間地域』『中国の産学連携』『地域産業の人材育成塾』『「食」の地域ブランド戦略』『元気の出る経営塾』他多数。

■友永公生（ともなが きみお）さん

1971年、旧大方町生まれ。



幡多郡黒潮町役場総務課行政人事係長。

1990年旧大方町役場（市町村合併後黒潮町役場）に入庁。建設農林部門で災害復旧担当を7年。その後、税務、介護担当を経て、防災担当を8年。2011年4月より現職。

「災い」のつく部署に長く在籍したこと、地元消防団員としての経験、日本防災士会高知県支部事務局長という私的活動を通じ、防災をライフワークと位置付けている。

また、（社）高知県自治研究センターの研究者として、地域社会を維持していく仕組み「産業福祉」の研究にも参加し、あるべき自治を模索中。

講師の紹介



■渡邊美恵子（わたなべ みえこ）さん

青森県生まれ

結婚により岩沼市民となる。

夫、長男、長女、義母の5人家族。

市総合計画審議会委員、まちづくり市民委員等を務める。現在、市主任児童委員。

当日プログラム

- 12:30 開場・受付
- 13:00 開会
- 13:10 基調講演「東日本大震災と産業の復興」
明星大学教授（一橋大学名誉教授） 関 満博 氏
- 14:40 被災地支援体験報告「直後の気仙沼での自治体支援の体験から」
黒潮町役場 友永公生 氏
- 15:30 一休憩一
- 15:40 被災体験報告「住民の視線による復興計画策定へのかかわり」
宮城県岩沼市震災復興会議委員 渡邊美恵子氏
- 16:40 総括「被災後に求められる行動」
明星大学教授（一橋大学名誉教授） 関 満博 氏
- 17:00 閉会

第1回「3.11東日本大震災から高知は学ぶ」シンポジウム

～震災時震災直後はどうだったのか、そこから今まで～

2012年2月4日（土）

於・高新文化ホール

（司会者）

皆さん、こんにちは。

まだ受付されている方もいらっしゃるようですが、定刻になりましたので、ただ今から第1回「3.11東日本大震災から高知は学ぶ」シンポジウムを開催したいと思います。

私は、本日の主催であります、高知県自治研究センターで今日の司会・進行を担当させていただきます石川と申します。どうかよろしく願いいたします。

（会場から拍手）

昨年の、大変衝撃的な3.11の大震災から11カ月がたとうとしております。当初は多くの映像や記事が流れ、本当にこれを機会に日本というのは変わらなければいけないのだなと思いつつも、最近、ともすれば、どうも早くも忘れ去られてかけているような気も若干いたします。

特に高知県においては、南海大地震が50年以内に、80%から90%の確率で来ると言われています。人によっては、「そのサイクルが50年ではなくてもっと早いのだ」と言う方もいらっしゃいますし、それはもう我々が知ることはありません。しかし、災害が間違いなくやってくるであろうということを前提にして、高知の街の在り方、地域の在り方、そういったものを考えようといった趣旨で、今回は第1回ということで開催をさせていただきました。第1回ですから、これから引き続き連続する形で何とか開催をしていきたいと思っておりますけれども、ぜひ今後ともよろしく願いをいたしたいというふうに思います。

それでは、本日の主催者を代表しまして、当センター副理事長の折田晃一よりごあいさつを申し上げます。

（折田副理事長）

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました、自治研究センターで副理事長を務めております折田でございます。

本日は、土曜日の午後という時間帯、多くの方にご参加をいただきました。本当にありがとうございます。また本日、講演・報告をいただく関先生、渡邊さん、友永さん、大変お忙しいところ、関先生と渡邊さんにおかれましては、遠路はるばるご来高いただいたことに心より感謝を申し上げたいと思っております。

先ほど、司会から申し上げましたけれども、2万人近い尊い命を奪った東日本大震災から11カ月が経過をしようとしているところでございます。私たちは、今なお多くの被災者の皆さん方がさまざまな困難等に直面しながら苦闘されている、そのことを決して忘れてはならないと思うところでございますし、今、日本の社会はさまざまな課題が山積している状況でございますけれども、何より優先されるべき最大の課題は、震災からの復興、再生であることは論を待たないだろうと思っております。

そして、そのことを高知の私たちがやっていくためには、何よりも東日本大震災後、そこから復興に向けてさまざまな営みを行われている方々や、地域の皆さま方から多くのことを学んでいく。そういうことから始まるのだろうと思っております。

本日のシンポジウムは、私どもが「地域産業振興人材育成塾」でお世話になっております、本日の基調講演をいただきます関先生が、ちょうど震災当日、釜石市で被災をされて、その後、ずっと釜石の復

興の現場に立ち会っている。こういうお話を聞いたことからこの企画ができたわけでありますけども、ここに掲げてありますサブテーマ、「震災時震災直後はどうだったのか、そこから今まで」。こういうサブテーマの下で、研究者のお立場から、あるいは被災者のお立場から、そして被災直後、現地で支援に当たった立場から、それぞれのご報告を受ける中で我々の学びを始めていきたいと、こういうことを考えて本日の企画に至った次第でございます。

先ほど、司会の石川からも申し上げましたけども、第1回のシンポジウムということにさせていただいております。今後、私ども自治研究センターの研究テーマとしても、「命と生活を守ること」。そして、「その観点に立ったまちづくり、地域づくり」。このことにこだわった研究活動を展開してまいりたいと思っております。今日は、その第1回のシンポジウムと、こういうことになります。皆さま方の今後とも私どもの活動に対するご協力もお願い申し上げたいと思います。

本日は、やや欲張ってしましまして4時間という長丁場になりますが、その割にはフロアの皆さま方からご意見をいただく時間というのは少なくなろうと思っております。大変恐縮でございますけれども第1回ということで、まずそういうお三方のお話からやっぱりきちっと学んでいくと。こういうことで皆さま方のご協力もいただきながら、第1回のシンポジウムを成功させていただきたいなと願っております。

最後までのご協力をお願い申し上げまして、言葉整いませんが、主催者を代表してのごあいさつとさせていただきます。本日はよろしく願いいたします。

ありがとうございました。

(会場から拍手)

(司会者)

それでは、お手元に封筒に詰めまして資料をお配りしておりますが、資料の中身を若干確認させていただきたいと思っております。

まず、1枚もので両面刷りの本日のレジュメを入れてございます。

そして、本日のフライヤー、事前にフライヤーを作りました。その中にお3人の顔写真、プロフィール、そして今日のプログラム、時間の流れ等も書いてございます。

そして3つ目が、これは友永さんの資料になりますけれども、パワーポイントの原稿で8枚ものカラー刷りのものが入れてあります。

そして、これは渡邊さんの資料ですけれども、宮城県岩沼市の震災復興計画グランドデザインという、これもカラー刷りの資料を入れてあります。

そして最後に、できればアンケートということで、皆さんのご感想を寄せていただきたいということでアンケート用紙を入れてあります。

以上、もしない場合は、恐れ入りますが受付の方までお申し出ていただきたいと思っております。

それでは早速、本日の基調講演ということで入っていききたいと思います。

明星大学教授、関満博先生から「東日本大震災と産業の復興」ということで、産業復興という視点から、基調講演の約90分間いただきたいと思っております。

それでは先生、よろしく願いいたします。

基調講演

「東日本大震災と産業の復興」

明星大学教授（一橋大学名誉教授） 関 満 博 氏

（関 氏）

皆さん、こんにちは。初めまして。

約1時間半の時間をいただきましたので、今日のテーマの東日本大震災と、どちらかというと産業とか中小企業の復興という観点からお話し申し上げていきたいというふうに思っています。

私自身、専門が地域産業というものでして、地域の産業をどうするかというのが主要なテーマであります。もう40年ぐらやっているんですけども、最初の30年間ぐらいはどちらかというと機械工業地域というものを中心にやっていたんですが、この十数年、中山間地域とか条件不利地域の産業をどのようにしていくのかということ为主要な仕事としています。

今回被災した、特に岩手県の沿岸地域というのは、私は20数年間ずっと付き合ってきた所でありまして、後で申し上げますけど、被災をしてしまったということになります。

この高知県はこの3年ぐら、実はかなりの頻度でお邪魔してまして、私の最近における中山間地域問題の主要な現場は、実は高知県ということでありまして、多分、高知県内で事業者をもう80軒ぐらにお邪魔してお話を聞いてきているということでもあります。

高知をずっと歩いていて、三陸と非常に似ているとも痛切に感じてまして、さらに被災の現場からすると、高知県は非常に危ないというようなことも痛切に感じています。今日、そういったところもベースに置きながら、現場の話を少し進めたいというふうに思っています。

最初、半分ぐらを、スライドでご紹介します。その後半分ぐら、産業の立場からどういうふうに見ていくのかというお話をしていきたいと考えています。

この写真は、日本スチールですね。新日本製鉄、釜石製鉄所であります。

この写真は、駅前写真ですね。JRの釜石駅を出ると、すぐ新日本製鉄の釜石製鉄所があります。

この写真は、地震の1時間10分前の写真です。今の写真というのはちゃんとデータが分かりますので、確認したら1時36分と書いていましたから、ちょうど1時間10分前ということになります。



この日、私は県庁から頼まれまして講演会ということでありまして、

3時から講演ということなのでですね。この釜石、東京からまいりますと、東京駅から約4時間半かかるということでもあります。ですから早朝に出て、昼過ぎにここの駅前に立ったということになります。

今回被災した三陸から福島、茨城県あたり、ずっと被災しているのですが。特に、三陸の宮古という所がありますね。あのあたりから気仙沼のあたり、この辺がリアス式海岸ということで、津波によって相当やられたということなのですが。あのあたりは、東京から一番遠い所なのでですね。例えば、宮古という市は人口5万人以上の市で、東京からの時間距離が一番かかるんですね。どうやっても、宮古に行くには東京駅から5時間かかるということにして。東京から5時間かかる市というのは、5万人以上ではここしかないということですね。5万人を外しますと、私の印象だと宿毛あたりが一番遠いということになりますが、この三陸のあたりは4時間半から5時間かかるという、大変交通条件は悪い所ということになります。

この釜石、かつては、(今でもありますけれども)、新日本製鉄釜石製鉄所は100年以上、日本の製鉄業の発祥の地の1つなのですが。100年以上ここで新日鉄は鉄をやっているのですが、実は、1988年か89年ごろに、全国に展開している製鉄所を相当閉鎖、ないしは高炉を休止したということがありました。

これは新日鉄だけの問題ではないということでした、日本産業全体の大きな構造転換であったということですね。ですから、象徴的な事実として新日鉄が高炉を止めたということになります。

この高炉を止める前の釜石というのは、人口10万人ぐらいいました。国勢調査でいきますと9万数千人なのですが、調査に載らない人たちも随分いますので、10万人の町だったということです。そのころ、この工場の中には8,000人が働いているという、日本の企業城下町の典型的な都市が釜石だということになります。

ただ、高炉を止めてから現在、ガタ減りしていますね。これはずっと先まで新日鉄の工場が並ぶのですが、高炉を止めてから今どうなっているかということ、今は高炉がありませんから、製鉄事業をやっていません。何をやっているかということ、東京湾にあります新日鉄の君津の製鉄所で線材、鉄線を作りまして、それを船で運んで釜石港に付けて、そしてこの工場に送り込んで。この工場の中ではそれをよって、車のタイヤの中のスチールポットというものがありますけども、それを作っているだけなのです。ですから、材料を持ってきて選るだけです。それだけの工場です。ですからこれだけ要らないのですけどもガタイは相変わらずということです。

従業員の数は、現在は250人です。8,000人の工場が250人になってしまったと。ということで人口が、かつて10万人いましたけれども、震災の少し前の2010年6月に人口4万人を切ってしまったということです。この震災でさらに減っておりますから、多分今3万5,000人ぐらいということになっているのだろうなというふうに思います。

ずっとこの町とは付き合っているのですが、何かちょっと違和感があるのです。どういう感じかというと、人口4万人の市にしては、いろんなインフラが非常に豊かなのです。やはりさすがに新日鉄が100年もいた町ですので、道路やその他の社会インフラが非常にしっかりしていると。それを痛感させられる町ということでもあります。

また、商店街もちろんあるのですが、意外に空き店舗が少なく、この町は割とちゃんとやっているのです。何かちょっと変ですね。いろいろ調べていきますと、新日鉄に勤めた方が多くて、厚生年金のレベルが非常に高いということで、リタイアされた方が多いのです。ですから、実際の経済力よりも購買力が高い町というのがこの釜石の特徴だということでもあります。

ただし、そういった方はもうだいぶ年齢が上がってきまして、あと10年でいなくなるということで、10年後、釜石は大変なことになるねというのが、震災前の私たちの見方であったということでもあります。

そして、この日3時からホテルの2階で講演会ということになりまして、そこで打ち合わせをしていました。そうしたら2時46分、急に地震が起こりまして、かなり揺れました。ただし、私自身いろんな地震にも遭っているし、例えば阪神大震災でも中越沖地震のときの後の支援をずっとやっていたので、震災とはどんなものかというのをある程度分かっている方ではありますが、このときの地震は、釜石ではさほどではなかったです。結構長い時間は揺れましたけども直下型地震ではありませんので、大体150キロぐらい沖の方の地震で震源地は離れていますので、地震は、私自身大したことはないなと思いました。

ご覧のものは何かというと、私がいた控室に置いてある冷蔵小ケースです。小ケースの中のビールは倒れましたが、このケース自身は倒れてない。天井から電気が落ちることもない。ガラスも割れない。部屋を眺めますとこんな感じです。多少、机は揺れましたが、さほどのことではないと。ちょっと会場を見ましようということで会場に行くと、ドアがちょっと外れたかなということなのですが、部屋に入るとこの程度です。ほとんど影響はない。これが、釜石での地震の直後です。



ただし、あのあたりというのは津波の歴史がありますので、ちょっと1回外へ出ようということで外へ出ました。



これが、地震5分後の釜石市街地の写真であります。どうでしょう、誰も慌てていませんね。家が倒れているわけでもない。実は私、ずっと歩きましたけど、ガラスが割れていたのは1カ所だけ。どこかの飲食店のガラスのドアが外れて、倒れて割れているだけ。あとそれ以外に、ガラスの割れているのは1つも見ませんでした。この程度でありました。

私はほかの人に比べて多分、地震・津波の知識は豊富にあります。というのは、三陸津波の過去の到達点等をずっと見て回ったこともありまして、大体この地形だとどんなことになるのかということは大體分かっています。

防災無線が始まりまして、「津波は5メートルである」というふうなことを言っているのですね。あの「5メートル」という言い方がまず問題があるというふうに、私には思えます。どういうことかという、気象庁が言っている5メートルというのは海面での高さです。「海面高」と言います。それが陸に上がりますと、5メートルの津波が10メートル、15メートルになってしまうのです。これを「浸水高」と言います。さらに幅が狭いと、遡上（そじょう）します。ぐっと上がってしまいます。これを「遡上高」と言っています。今回の震災では、一応確認された最高到達点が40.5メートルです。ですから、5メートルが15メートルになり、場所によっては40.5メートルになるということなのですが、気象庁は5メートルと言うのですよ。そうすると、知識のない人は「ああ、5メートルか」と。じゃあ、6メートルにいれば大丈夫かと思って6メートルに避難して、そこで待っているなどということも起こり得まして、あの気象庁の言い方は罪だということで、あれが問題だなと私は思います。

私はいろんな所を見ていますので、この地だと地形からいって15メートルまで行く可能性がある。ただし、20メートルは行かないと判断しまして、20メートルを確保しよう。しかも、もう1つの常識なんですけども、大体太平洋岸のあの辺で津波が来る時間は、地震後30分と言われているのです。ですから、30分時間があると、30分以内に20メートルを確保する必要があるというように判断しまして、何人か引き連れてそっちへ向かったということになります。

向かう途中で、この左の人は市役所の人らしいのですが、子どもたちを避難させ始めていました。これはお寺のちょっと手前の芝生の広場なのですね。ここに子どもたちを集め始めました。私は通りすがりだったのですが、彼に聞きました。「ここは標高何メートルですか？」と尋ねましたら、「6メートルです。津波は5メートルだから大丈夫です」と言うから、「それは駄目です。ここは危ない。もっと上に行かなければ駄目ですよ」ということでみんなを上へ上げて、上に向かいました。



それで、ここがちょうど私たちが避難した場所なのですが、私のイメージだともう標高20メートルは十分ある。この先は奥にがけがありますので、余震がバリバリ来ていましたから、がけ崩れの懸念もあるということで、あんまりここに近づいたら危ないということで、この場所を我々の待機場所に決めまして待っていました。

おばあちゃんたちはこんな感じで、寒空の3月11日、この後から雪が降りました。とても寒かったです。



それで待っていると、30分後に第1波が来たと。ちょっと見にくいですが、実際に来ているのです。あまり見える所まで行ったら危ないですからね。奥の緑が、さっきの新日

鉄です。それで、もう津波が来ています。みんな、上から見ているのですね。「うわあ、来ちゃった」という感じですね。第一波は、それほどでもなかったです。2波目が大きかったという感じがありました。



とても寒くてしょうがなく、3時間ぐらいここにおりまして、ぼちぼち下りようということで下りてみました。これが、津波の先端です。この車がありますけども、あの後ろに少し広そうな所がありますが、あそこは先ほど子どもたちが避難していた場所ということで、やはりあの場所だと駄目だったということで、こんな感じなのです。

どうせホテルも駄目だということで、避難所をどうするのだという話をしていたら、近くに病院があって、そこが避難所だということで。そこに向かおうとしたのですが、このときは町へ入れませんでした。とても足の踏み場もないということで、裏山から回って上がろうということで墓地を上がりました。こんなふうに墓石もひっくり返っていましたが、とにかく墓地を上まで上がって、そこからやぶを越えて、尾根まで上がって裏山に出たら、町が動いて見えたということで。これは6時過ぎなのですが、最近のカメラはよく写りますね。現物ではこのようには見えませんが、こんな感じです。

火災が1カ所だけあります。あれは新日鉄の敷地内ということで、プロパンガスだと思うのですが、バクンバクン爆発していました。この釜石市については、市街地で火災はこれだけでありました。

それで、病院の避難所に一応入りました。これは翌朝です。翌朝なので、もう人がだいたいなくなってしまったのですが。避難所というものに初めて泊まる羽目になりまして、いろいろ勉強になりましたね。これは多分、ベッドが4つぐらい入るスペースの病室ですけども、こういう所に避難すると大変ですよ。どういうことかという、起きているうちはいいんですけど、横になると、すし詰めというものはまさにこれだなということで、寝返りも打てない。トイレも行けないんですね。よく映像で見る避難所というのは体育館が多くて、通路ができるようですけども、こういうのは通路ができっこないんです。ですから、もうどうしようかと思いました。



ところが、余震が時々来ます。そうすると、皆さんワーッと起きるんですね。40人ぐらい入っているのですが、40人で懐中電灯を持っている人は2人だけでした。そんなものですね。急にパッと電気をつけてくれますので、その間をぬってトイレに何とか行けるということでありました。それで、ほかはもう真っ暗なのですね。



携帯電話の明かりは手元しか明るくなりませんので、足元が見えないということなのですが、さすがに釜石、訓練が行き届いているなと思いました。夜中にトイレに行きますと、入り口におばちゃんが一晩中いました。何をやっているかという、誰かがトイレに入ると、入り口から懐中電灯で光を当ててくれるんですね。これでもう用が足せます。あれはたいしたものだなと思いました。そんなことを考えなが

ら、一晩過ごしました。

ただ、毛布を配ってくるのですが、40人ぐらい部屋にいます、私は63歳なのですが、若い方なのです。私がこういう場所で一番若い。大体、毛布は年齢順にいきますから、私には来ないのです。しょうがないなと思ってあきらめていたのですが、夜中の8時過ぎぐらいに看護婦さんが、病院はベッドを囲むカーテンがたくさんあり、それを持ってきてくれまして、カーテンにくるまって横になったということでもあります。

それで、翌朝を迎えます。これはちょうど病院の5階なのですが、上から見るとこういう調子なのです。「何だ。これは」ということで、5時過ぎぐらいに下へ行くと、こんな調子です。よく皆さんがご覧になる被災地の映像という、もう道路ができてから撮った写真が多いのですが、これは翌朝ですので、メインストリートがこういうことになっているんですよ。どうにもならないということでもあります。

ここは私が2階で講演する予定だった所です。この通りは、釜石のメインストリートということになります。

とにかくこんな調子でして、もうどうにもならないというのがこれ、翌朝の6時前後の写真です。

こういう、2階に人がいるのですよ。多分、津波はこの辺に来たはずですよ。この中に人がいるのですよ。下りられないのです。「下りられないから何とかしろ」と言うので、これを少し動かしながら下りていただいたとか、そんな感じでありました。

車という車は全滅ですね。よく立体駐車場で、構築物で2階があって、3階とか屋上にまで駐車できる施設がありますが、2階までは全滅ですね。屋上に乗っていた数台だけが助かったということで、車はもうぐちゃぐちゃということですね。どうにもならないということです。



この後ろに見える建物が、私がこの5階のこの辺でお世話になった病院であります。200人ぐらい入院患者がいたのですが、600人ほど我々のような避難の人間が押し寄せたということのようです。



これをご覧になると、こんな所に線がありますけど、多分津波はこの高さまで来ました。ここは標高が6メートルぐらいの所ですから、10メートル近くの津波がここに押し寄せたことを示しています。何でこんなことになってしまったのですかね。

ここで写真を撮っていると、また揺れが来るのですね。どんどん来まして、すぐまた防災無線が鳴りまして、「さあ、津波だ」などと言われて、「これは帰れない」という。私は翌々日に鹿児島にいなればいけない予定だったので、何とか帰らなければいけない。これは抜けてしまった方がいいという思いで、4、5キロ上流の方に県の出先があるというのは分かっていたから、そっちに向かいました。停電ですから電気が通ってないのですが、こういう所というのは自家発電の設備を持っていて、ここで初めて映像を見たということでもあります。

私はひどいヘビースモーカーでして、部屋で長いこといられませんので、外で道路を見ながらタバコを吸っていたら、翌朝の8時ごろ、重機が列をなして釜石方面に入ってくるのです。あれは驚きましたね。翌朝の8時にもう重機が、トラックに乗せられたものが列をなして入っていく。よく自衛隊がきれ

いにしてくれたという話がありますけども、実は建設業協会が相当活躍しましたね。そのとき分からなかったのですが、最近確認して分かったことがあるのですけども、岩手県の場合は建設業協会、県の協会があるのですね。あと、支部が各種ごとにあると。それで、もう以前から内陸部の市と沿岸部の市が協定を結んでいるのですよ。つまり盛岡と宮古、それから花巻と釜石、北上と大槌とか、全部連携ができていまして、どっちかがやられたときにはどっちかが支援するというのは前もってできていたそうです。今回については、翌朝早朝に県庁から協会の方に連絡があって、「すぐに出してくれ」という要請があって即出たということで、実は彼らはものすごく活躍しました。特に釜石に関しては、最初に入ったのが遠野の建設業協会で、2カ月は遠野が全部やっとな。その後は、花巻が全部やっとなというふうに言われています。そういうふうな連携ができていたということでもあります。

これはチョウザメです。かなり大きく、現物は5メートルぐらいあります。なぜこんな写真を出したかという、要するに昔は鉄で食べていた町ですね。鉄で食べられなくなりまして、新規産業を興さなければ駄目だということいろいろなことを手掛けていたのですが、その1つがキャビアの製造ということを考えていました。チョウザメを手掛けているのは全国で随分あるんですね。でも、なかなかキャビアなどを売っている所はないんですよ。キャビアというのはチョウザメから取りますが、かつてはウラル海が最大の産地でした。ただし、十数年前にワシントン条約で取れなくなってしまったのです。従って、現在流通しているキャビアは全て養殖です。ですから、今は世界的に養殖が禁止される前の10分の1しか取れないのです。ですから今、キャビアというのはキロ10万円なのです。



これは少し大き過ぎるのですが、普通は育てて8年でやっと取れるのです。8年で1キロ取れます。1キロ10万円ということです。これだと3キロぐらい取れますので30万円ぐらいします。こんな形で、日本で唯一キャビアの製造まで成功していまして、世界的にも評価されていました。これでいけるといふことで、本格的な販売予定は、実は去年（2011年）なのです。ところが今回の震災で、この養殖池が少し海に近い所にありますので全滅でした。15年かけてやっとキャビアができたのですけども、全滅という悲しい結果に終わったということになります。

それで、私はとにかく帰らなければいけないということで、（一応県庁の仕事で来ていますから）「とにかく何とかしてくれ」と聞いたら、「新幹線、高速道路、いずれも駄目だ」と。イメージできたのは、花巻まで戻って、当時は羽田便がありませんでしたので、花巻空港から北海道の千歳に出て、そこから羽田に帰るといふコースをイメージして、「とりあえず花巻まで行ってほしい」といふことで申し上げましたら、「花巻へいく道は旧道と新道の2本ある」と。こういうときは、新道は駄目です。どこかが土砂崩れを起こしています。トンネルの中が崩れたということで新道は使えないと。旧道だと、時間がかかるけど大丈夫です。やはり旧道の方が安定していますね。そこで、2時間ぐらいかけて花巻空港まで行きました。これが震災の翌日です。

昼ごろ空港まで飛び込んで入ったら、閉鎖なんですよ。「いつ開きますか」と聞いても「分かりません」で終わりです。仕方がないですね。それで、停電しています。

花巻の友人の農家がありますので、そこに潜り込むことにしました。途中でスーパーやコンビニに寄ったのですが、もう翌日の昼には、水は一切ない。ビールはあるということで、農家で籠城（ろうじょう）だと、ビールを買い込んで農家に行ったということでもあります。

ところが、日本というのは電化生活が浸透し過ぎて困りますね。石油ファンヒーターが動かない。電話も駄目。全然駄目ですね。従って、しょうがないのでろうそくに火をつけて、それで友人とビールと漬物で一晩過ごしたということになります。

3日目、午前中にパソコンを打っていたら電源が切れてしまいまして、困ったなあと思ったら、農村はすごいですね。3軒先の家は自家発電を持っているということでお邪魔したら、普通の生活をしてい

るんですよ。花巻自身実際被災していません。かわらの落ちている家を1軒見かけただけで全く被災がなかったのですが、停電はしているという中で電気を頂いて、それで充電して、またパソコンを続けました。

3日目の昼ごろになってやっと花巻に電気が通りました。駅前の知っているホテルに連絡して「空けるか」と聞いたら「空けます」と言うので、3泊目はホテルにやっと踏み込めたということなのですね。

いろいろ調べていると、帰る算段は結局、日本海側の秋田空港まで行かなければならない。秋田空港から羽田便があるということが分かったのですが、調べたら3日先まで満席なのですね。でも、我々はそういうことに慣れていますから、どうせキャンセルが出るということで3日先ぐらいのところを取りあえず予約入れました。

そして、次にやることは何かというと、花巻から秋田空港まで180キロということで、行く算段はタクシーしかない。道路は通れるということですが。このとき大変重要なことは、急にタクシーを拾って「180キロ行ってくれ」と言っても、こういう場合は行ってくれません。ですから、前もって予約しなければいけませんから、即タクシー会社に行き、社長をつかまえて「明日、秋田空港へ1台ほしいが、いいか」と言う「分かりました」と。11時に迎えに来てくれということで、いくら掛かるかと聞いたら、5万円ぐらいという。「うわあ、1人で5万円か」と思って、ホテルの、フロントで「私は11時に秋田空港に向かう。タクシーだからあと2人ぐらい乗れるが…」ということで、翌朝行ったら3人希望者がいました。2人だけ引き受けましょうということで、秋田空港に突進しました。

空港に着いてまずやるべきことは、ANAとJALの両方のカウンターで空席待ちの番号をもらうこと。チケットを予約するときに安いチケットでやると面倒ですよ。こういうときはノーマルにしておくのです。ノーマルにした方が、変更が簡単ということで、私はJALを待っていたのですが、ANAとJAL両方もらって、見たら60番目なのです。後ろに3便ありますので、今日中に帰れるなと思いき、3人で「じゃあ、お茶でも飲みましょうか」と言って喫茶店に入ったら、座った瞬間にもうコールですよ。満席のはずが、80番まで1発で通る。要は、こういうときは200席ぐらいの半分も来ないのですよ。だからほぼ1便ですぐ乗れて、4時過ぎぐらいには東京へ帰れたということでもあります。こういうことはやっぱり、普段考えてないといけません。こういう場合はどうするか。ケチってはいけません。割引チケットなどを取るとかえって面倒だということでノーマルを取るとか、タクシーの使い方とか、こういうのがやっぱり大事なことだなと思いました。

たまたま、私は昨年(2011年)の3月で定年退職でして、国立大学を辞めて私立大学へ移る時期でした。今いろいろと手続きがうるさいですね。特に年金の手続きは大変でした。まいりました。何とか落ち着いたのは4月の中旬でした。東北の復興に向かわなければいけないということで、まずあちこちに行きました。

まず行ったのが、大船渡です。4月の末の大船渡です。もう50日たっていますが、こんな感じでした。道路だけ開いたというだけで何も変わってないですね。家が海の中に浮かんで、船が陸にいる。

これは普通の景色ですね。この景色なんかは非常に象徴的になんですけども、津波にやられると大体こういう吹き抜ける感じなのですね。こんな形で抜けていくというのが原型でしょう。

これは自衛隊の駐屯地です、これを越えると、これが陸前高田であります。陸前高田は平野なのですね。ちょうどこの高知によく似ています。沖積平野ですね。ですから、平野は全部砂でできているのです。

これ鉄筋コンクリートの3階建てですけども、ひっくり返っているのですよ。女川という所は、鉄筋の5階建てがひっくり返りました。どういふことかということ、鉄筋コン



クリートの建物の基礎はせいぜい4、5メートルですね。それで、砂の上に乗っかっているわけです。地震で液状化現象が起こって、少し揺れて基礎がおかしくなるところに鉄の固まりの津波が当たると軽くひっくり返るといふことですから、鉄筋の5階建てぐらいまでは危ないですよ。ですから、例えばこの高知がやられたときに、5階建ての屋上に行けばいいだろうと思ったら大間違いです。鉄筋の建物はやめた方がいい。重量鉄骨がいいですね。

例えば、これは重量鉄骨ですね。見事に破壊されていますけれども、むしろ鉄骨は残るのですよ。つまり、この壁面が割と柔らかいから、壁面をぶち抜いていくのですね。



多分これ、この建物ですとパイルはかなり深いということで、こういう建物は残る。同じ建物でも鉄筋と重量鉄骨がありますから、気をつけなければいけません。ですから、それは見極めておく必要があるということです。鉄筋の5階建てはもう危ないと考えた方がいいと思います。

これは、陸前高田の海場にある公営住宅なのですが、これは本当に海側です。これは、4階までは完全に吹き抜けたということですね。この高さの津波が、広い海岸ですよ、こんな高い津波が来たのですね。それが全部ぶち抜いていったということにして、こんな調子です。

そしてこれは何かというと、「この建物には、もう遺体はありません」という表示であります。

これは陸前高田です。何か掃除したみたいに見えますけど、これは全部引き波でがれきを持ち帰ってくれたということで、きれいに掃除されてしまったような感じになっています。何もないということになります。

逆にこれ、少し奥の方の田んぼです。田んぼには家が流れてきてこんなになっていまして、どうするのですか。こんなですよ。これを再整備するというのは、頭痛くなります。地盤沈下もしています。

これが、陸前高田あたりの水田地帯。三陸には水田地帯がほとんどありません。後でお話になる岩沼のケースは多分水田が多いでしょうけども、北から気仙沼ぐらまでは、水田があるのはこの陸前高田ぐらい。あとは小規模の水田があるだけです。ですから、今回、農業被害というのはほとんど宮城県なのです。後でお話になる宮城県岩沼のあたりとか仙台平野、あちは農業被害があるということになります。



これは、今お話しした、先ほどご覧いただいた写真の少し上でありまして、要はここまで水が来たのですよ。浸水地域には仮設住宅が建てられませんので、その少し上にある小学校の校庭に仮設住宅が建ち始めた。桜が咲いていますけど、これは4月28日です。だから多分、高知と1カ月くらい違いますが、そういう時期に建ち始めたということになります。

この写真は、もう少し北の方の、岩手県の宮古という所でして、鉾ヶ崎（くわがさき）という場所で、ここは防潮堤がないのですよ。ですから完璧にやられています。不思議なことに、土蔵は意外と残るのです。各地で土蔵だけ残っているのです。津波に強いんですね。ほかの建物は全滅なのですが、土蔵だけは意外とあちこちに残っているというので、何か特別なものなのかなということを感じました。



これは水産加工工場です。私の友人の工場です。この人は、14工場持っていたのです。14工場のうち7工場、半分がこんな調子であります。半分やられてしまいました。彼は55歳なのですが、40歳ぐらいのときに親の仕事を引き継いだときには2工場、売り上げが10億円だったのです。それが、震災直前が14工場、売り上げ40億円までいったといいます。三陸では水産加工業は成長産業なのです。後で少しご説明しますが、水産加工という衰退産業に思われている方が多いのですが、三陸では成長産業です。15年前、5億円、10億円の企業で、50億、100億になっている所は幾つもあるのです。後でご説明しますが、実は成長産業でした。

彼は販売をやられていました。だけど、彼はこの前会ったら面白いことを言っていました。「先生、今がチャンスだよ」と言う。「ええ？こんなにやられてチャンスなの？」と聞いたら、「おれの所は資産が多過ぎて、息子に引き継ぎするのをどうするかと思っていた。今はゼロだ。このチャンスに引き継いでしまう」と言うのです。たいした人がいますね。こういう人がいれば三陸は大丈夫だと思いましたが、彼はそれで相続をやってしまうらしいです。

これは定置網を探している漁師さんたちですね。上から見ると、こんな調子です。



これが、5年ぐらい前の写真なのですが、田老町ですね。万里の長城と言われた、世界一と言われている、高さ10メートル、幅2,500メートルの田老防潮堤であります。この田老町というのは、明治のときに2,000人が死んでいるのです。昭和の津波のときには1,000人死んでいます。これができて、ここに住んでいる人たちは「ここが世界で一番安全」と言っていたのですよ。ご覧のように、車がそこにありますが本当にこんな感じで、本当に万里の長城でした。

それで結論から言うと、今回は180人ぐらい死亡ないし行方不明です。人口は明治より多いのです。明治のときは2,000人。ただし、夜でした。それから昭和が1,000人。今回は200人弱。それで、この防

潮堤はどうなったかという、こんな感じですね。どこかへ消えてしまってありません。あれだけの頑丈そうな防潮堤が見事にはがされています。死者および行方不明が200人弱ということで、地元で何とされているかという、「やはりこれは壊れたけども、防潮堤が津波を相当減水してくれた」という言い方がされています。消防団はこれからきちっと検証しなければいけませんを取りあえずはそういった受け止め方がされているということでもあります。こんな感じで、何にもないと。もう無残です。こんな格好で、防潮堤がもうぐちゃぐちゃにされてしまったということです。でも、高知県の海岸地帯、これだけの防潮堤はどこにもありませんから、高知県は丸裸という感じです。こんな感じです。

これは、もう少し南の山田町の防潮堤で、ひっくり返っています。これをご覧になると、人がここにいますから何となく大きさが分かるでしょう。この防潮堤って、こうやって鉄筋はこれしか入ってないのです。私もこの世界は素人でよく分からなかったのですが、「防潮堤はこんなのでとめているのですか」と専門家に聞いたら、「いや、防潮堤というのは津波避けではない。高潮避けだ」と言うのです。横からの圧力を考えていない。乗せているだけですよという。津波は鉄の固まりみたいですから、軽くひっくり返ってしまう現実であります。

この建物は、先ほどの私の友人の水産加工のほかの工場です。もうぐちゃぐちゃです。

これは有名な大槌の画像です。これは下ろしてしまいました。傾き始めたので危険ということで下ろしまして、解体してしまいました。ところが、地元はこれを歴史的なモニュメントにしたいということで、レプリカを作って保存するという方向で今動いているということでもあります。

これが大槌の町役場で、町長さんたちがこの屋上に逃げただけで、屋上を超える津波で職員が数十人流されたというのがこれです。現在行っても、この中というのは何もいじってない。書類が散乱したままで、ぐちゃぐちゃ、どろどろで、今でも、この状況は続いています。

大槌は火災も発生しまして、火災になると重量鉄骨もあめのように曲ってしまうということになります。

沿岸にあるような工場というのは特にやられていますね。こんな形で吹き抜けると。ここは小さな船の修理工場なのですが、こんな感じで何も無い。大体こんな感じで、沿岸にある工場というのはこんな格好で吹っ飛んでしまいます。

これはわざとらしいのですが、そこに3時17分をさしている壁掛け時計が落ちていました。本当かなと思うのですが。大体この時間に、30分後に津波が来たということなのでしょう。本当かなと思うのですが、本当にわざとらしく置いてあるのです。

これが、重量鉄骨だけどこれは釜石の沿岸にある鉄工所です。工場はこんなふうにありますね。これも5月の頭ぐらいです。

これがちょっと問題になっていて、この建物は合板工場です。多分、波がここまで来ていますね。それで、中はやられてしまいました。これは今、裁判になりそうなのです。どういうことかという、日本の合板というのは少し前まで外用材を買って



ました。昔は内用材、それから副用材。それを丸々輸入してきました。大体その防潮堤の外の埠頭（ふとう）に陸揚げするのです。その横に合板工場を造って、ここで合板にして、また船で出していくというのが日本の合板工場の典型です。特に三陸は、宮古と大船渡と石巻、この3カ所が日本の合板の多分4分の1ぐらいやっているんですよ。それがみんな吹っ飛んだそうです。

問題は何かというと、この写真は5月2日の写真です。ここにある丸太というのは、回収して担ぎ直した丸太なのです。何が問題になるのかというと、皆さんの頭の中に宮古の映像が残っているのではないかと思います。防潮堤を黒い波が超えて、船や車がダーッと滝のように落ちるようなシーンがありました。あの流れの中にこの丸太が巻き込まれて、丸太が時速100キロで町を襲ったのですよ。それで建物が破壊されたということで、想定外のことが起こったということです。県の条例ではこれでいいのしょうけども、結果的にそういうことが起こったということです。昔、打ち壊しなどというと、丸太を何人かで持ってドーンと建物を壊すでしょう。ああいう現象が起こってしまったということで、これは裁判になります。



この工場はセイホクグループという日本最大の合板グループなのですが、その工場なんです。この前、どうするのだろうと聞いたら、もう多分、こういう所ではこの事業はできないということ。さらに、今、合板材が必ずしも外用材依存ではなくなっている。山元でもいいということで、今後はそういうことをせざるを得ないということになります。

その宮古の周辺に行きますと、湾岸には必ずこういう造船所があります。そこには鉄工所などがたくさんあるのですが、みんなこんな調子です。要するに、建物が津波で吹き飛んでしまっている。多分、この工作機械はアンカーがちゃんとしているでしょう。工作機械だけが残っている。こういう格好になるということになります。

ここに何か壁があるでしょう。これは防潮堤です。先ほど申し上げた、宮古では滝のように黒い波が流れてきた。実は、このことなのです。だけど、防潮堤は残っています。なぜかという、ここは津波が30度ぐらいの角度で来たのです。直撃、直角ではないのです。直角で来たら押し流されますけど、30度ぐらいなので力が分散して、津波が乗り越えてきた。何が起こるかという、先ほどのように木材によってこんなに破壊され、この辺は全部なくなってしまいましたが、ここから少し奥の方は建物が大丈夫なのです。どういうことかという、引き波がなかったのです。この防潮堤が邪魔して、帰りがない。一昼夜ぐらいここはフル状態だったそうですね。フル状態になって、奥の方の建物は、実はそのまま残りました。いろいろなケースがあるのです。防潮堤の角度とか、そういうことで被害の状況は相当に違うということが言えるようになります。

こんな形で、これは旋盤ですね。これは車輪。こういうのが必ず漁業基地にありまして、建物はなくなってしまっても機械だけ残っているが使えません。

この建物は少し異質のケースなのですが、東北というのは少し前まで工業過疎なのです。ちょうど高知と一緒に。ところが新幹線と高速道が入って以来、内陸部はもう日本を代表する工業地域なのです。開拓工場が並びます。特に岩手県の北上市周辺というあたりは、今でもまだ工業集積が続いている。ほかのオールジャパンは全部へこんでいるのですが、日本でこの時期にまだそういった新しい工場ができてくるのは、実は岩手県の内陸部だけだと知りました。日本最大の集積地になりつつあるということなのです。半導体と自動車です。

そのあたりが少し手狭になると、沿岸部に二次展開します。逆に沿岸部は、かつての新日鉄釜石とかそういう所は縮小していますから必死で誘致をやっている。この15年間ぐらいの間に、沿岸部の特に宮古とか釜石は、ハイテク中小企業がかなり取っています。例えば、宮古には30数社、ハイテク系の中小企業が出ています。そういった企業は後から来た新参者ですので、湾岸に土地がありません。湾岸は全部、水産系と造船系で囲まれていて、新しく進出する余地がないということで高台を削って立地し

ていますので、実は今回のような津波にはほとんど遭ってないのです。

私は北からずっと気仙沼までそういった工場を歩きましたけど、ハイテク中小企業でやられたのは10社もないのです。本当に少ないです。ほとんど無事でした。ですから、今回の津波に関してひとつの論点が、日本のサプライチェーンの問題があるということで特に騒ぎましたけども、大手の復興の方が遅かったです。中小は、現実にはほとんど被災してないのです。中には、たまたま被災したのもあります。宮古は残念なことに、30数社そういうのがあるのだけど、2社やられました。そのうちの1社、「ウェーブクレスト」という会社です。ご覧のように、新しいタイプの工場が被災するとこんな様子です。天井には配線が多いですから、電線が「すだれ」のようになります。

これが、新しいタイプの工場がやられた場合の典型的なケースです。何をやってたかというところ、ここはキャノンのSMTラインです。プリント板に部品を置く作業と、東芝のエレベーター用のハーネスの組み立てというのがこの仕事です。設備は全部流れてしまって、こんな感じでした。

これは5月初めの写真です。プラットホームがきれいにできていまして、すごくいいですね。やられてしまいました。

この前行ったら、きれいに掃除されているのです。どうしたのと聞くと、これは本当にいい工場なのです。中に柱が1本もないのです。本当に使い勝手のいい工場で、いいなという感じなのです。先ほどの「今がチャンスだ」と言ったおじさん、これを言い値の半額で買ってしまいました。むこうは1億円と言っていたけど、値切って5,000万円で2つ買ってしまいました。だから彼は、被災したハイテク工場をこれから水産加工工場にするのです。たくましいですね。そういう格好であります。

併せて、ここからだいぶ離れた所に、1月5日に新工場がオープンしました。これが、別の場所での復興で一番早い復興です。それについては何があったかというところ、今回、被災に対していろいろな補助金が出ました。グループ補助金というのが出まして、投資額の4分の3まで出るようになったのです。ここは14億円の新工場を建てました。それに対して4分の3ですから、9億円ぐらいの補助金が出たからできるということですが、10億円規模以上のこういう形の新工場は、ここが第1号です。もう1月5日にスタートしています。早いです。

なぜそんなことが可能になったかというところ、被災した市町村はたくさんありますが、特に産業系の復興のスピードは宮古市が圧倒的に早いです。まだほかの所なんかは土地の手当もできてないという状況なのですが、宮古はさっさと被災した企業と話をつけた。とにかく一番のテーマは、辞められたら困るということですので、宮古市の産業団体がきっちり付き合っただけで対応してここまで持ってきたということです。やはり、各市町村の産業担当のとりくみというのが相当、特に産業復興に関しては大きく変えていく要因になっていくという典型がこれだと私は思います。

中小企業社が相談する相手がいないというのが現実でして、放っておくと倒産してしまう、あるいはどこかに行ってしまうということなのです。ですから、私はいつも知り合いの自治体には、そういう場合でもなるべく早く産業担当を本職に戻すべきだということを申し上げているのです。この宮古の場合は、産業担当が9人いました。2週間ぐらいの間に首長命令で4、5人戻れという。3月20日過ぎぐらいには担当者が戻ってまして、そこから即被災状況のチェックをやって、3月中には自主補給をするようになってしまったのです。ほかの所は6月、7月になってもできなかったのですが、宮古が一番早かったということで、地元の産業、中小企業の関係者の間でも大変称賛されています。ですから、宮古あたりへ行って地方議員の人たちと会うと、誰も文句を言う人はいないです。見事ですね。そのぐらいのスピードで宮古はやっているということで、これは市町村の考え方や力量の差が見事に出了というふうに私は受け止めているところです。

これはプレス工場ですね。これも、宮古は新しい工場を2つやられましたけど、これもやられました。こんな感じですよ。

これは、宮古の重茂（おもえ）半島のある谷です。今回の津波で確認されている1番の最高到達点が40.5メートル、この谷です。

これは何かというと、アワビの種苗場です。アワビの種を作っています。建物は流れましたが、ここでアワビの種を作っていました。ここが日本最大のアワビの種苗場です。ここで取ったアワビを全国に売っていたのです。アワビは2、3年かかりますから、これから2、3年は、アワビが品薄になります。これは最大の所でしたけど、海側を見ると何もないと。かろうじて鉄骨だけは残ったということです。40.5メートルの波が来た所ですから、ものが違うのですね。もう徹底的に破壊されました。

今朝の新聞に載っていたのですが、これはこの谷の漁港の横にある、漁師さんが出港前に集まる番屋です。なぜこんな写真を載せるかということ、これは和式トイレですが、和式トイレの金かくしもきれいに削れて「無い」のです。そんな感じの波だったということだろうと思います。

この谷をずっと上がっていくとこんな碑がありまして、「これより下に家を建てるな」と書いてあるのです。これは明治、昭和の津波を受けたこの所の先人がこういう碑を建てていまして、これに皆さん従っていまして、この集落はこのすぐ上にあります。ですから、人的被害と家屋の被害はありません。40.5メートルということ、実はもうすぐ下です。その下の漁業施設は全て流れたということでもあります。

漁師さんに「どうですか」と話を聞いたら、「家なんか残ったってしょうがないんだよ。俺たちにとっては、漁業施設が命だ」とは言っていました。命が助かったというのが現実です。ここは復興がすごく早いです。ここは三陸の漁業関係の復興のモデルケースです。というのは、この集落とこのエリアの漁村はモデル漁村と言われていまして、小学校の教科書にも出ている所なのです。重茂という所です。

どんな町かということ、もう30年前からこのエリアには「3ない運動」つまり「合成洗剤を売らない、買わない、使わない」海が汚れるということです。ここはもう30年前から、漁村のご婦人たちの手によってその運動をやっている。それから三陸の海というのは、「森は海の恋人」という言葉がある（気仙沼で生まれた言葉なのですが）。それが実践されていまして、ここは非常に意欲的で、毎年漁師の人たちが山に植林をするということをやっています。とっても豊かな漁村です。宮古の町まで車で50分です。だから、ほとんどこの人たちは漁業専業です。それで、所得が非常に高い。1千万級はごろごろいる。アワビと、もう1つ主要な特産物では、マツタケの山です。ですからアワビとマツタケがベースで、1千万級の施設がごろごろいる集落というのがこの辺りで、復興も一番早い。

よく新聞で報道される、船がたくさん流されてしまったこと、取りあえず船がそろうまでは全部共同作業をしましょうという、そういう動きはここが言い始めたことです。それが、特に岩手県では普通になっているということになります。

これは宮古の魚市場です。4月11日にオープンした、一番早い市場です。これは、宮古の市民向けの魚市場です。私、ここは大好きでして、行くと必ずここで買物をするのですが。これは5月1日ですけど、結構荷物があるでしょう。

それで、私がいつも行く店で見たら、生ウニがありました。牛乳瓶のような瓶に生ウニが入っていて、1本2,200円ぐらい。これでウニ丼が2杯食べられます。よく私は買って帰るのですが、5月に行ったらあるのです。馴染みのおばさんに「これちょうだい」と言うと、「先生、買わない方がいい」と言うのです。売っておきながら、買うなと言うのです。「いや、買って行くよ」と言ったら「いや、やめたほうがいい」と。「なんで？」と聞いたら、「ここにあるのは95%が北海道産だから」と。地ものは何もないのですよ。「このウニも北海道産です。日にちがたっているから鮮度が落ちている。だから買わない方がいい」と、売っておきながら売ってくれないという感じでありまして。いずれにし



ても95%は北海道産で、地ものはまったくないという状況であります。

最近面白かったのは、この前行ったら、このくらいの銀ジャケが1本1,000円で売っている。「あれ、銀ジャケがあるじゃない。どうしたの?」と言ったら、三陸というのは水温が低いから養殖の本場なのですが、魚の養殖ができないのです。ですからアワビとかカキだとか、あるいはコンブやワカメの養殖なのです。唯一、三陸で魚の養殖は銀ジャケだけです。銀ジャケというのは、ほかの所に放流しないでいいのですよ。湾で養殖できるのです。もともとの産地は、千島列島の沖の北極海です。それで、宮城県の女川とか南三陸町あたりの人たちが何とか頑張っ、て、養殖できる仕組みにしたのです。女川、南三陸が銀ジャケの産地です。シャケというのは、普通は刺身で食べたいけません。シャケには虫がいますので、必ず1回完全に凍らせて、解凍してスライスする。これはルイベというもので、食べていいのだけど、取ったままのシャケは生で食べられません。ただ、銀ジャケには虫がないのです。だから生のまま刺身にできる。「回転ずし」に出ているシャケのすしは、ほとんど銀ジャケということになります。

ところが、今回の津波で南三陸も女川も完全に養殖施設がやられてしましまして、シャケが逃げ出してしまい、寒い方に北上していった。10月ぐらいになるとちょうど宮古沖に寄ってきまして、入れ食いだということです。それで、こういう所に母船が並んでいる。漁師にきくと「あいつらはブラックバスと一緒にだ。礼儀を知らない」と言う。養殖されていますから何でも食べてしまうということで、漁場を荒らしているという。現在は駆除の感覚だという感じなのです。「ただ、持ち主は南三陸と女川じゃないか。勝手にいいのか?」と言ったら、「いや、よく分かっている。だから売り上げの一部は女川と南三陸に寄付します」などと言っているということでありました。

気仙沼は大変です。私は気仙沼の復興会議の委員をやっているのですが、ここは大変なのです。まず地震でしょう、地盤沈下です。80センチぐらい沈下しています。それと津波でしょう。火災があったのです。何の火災かというと、湾の先端に漁船用の石油タンクがひっくり返りまして、それに火がついて一気に市街地を焼いたということです。火災の影響もあるということで大変です。

現在でもこういう調子です。これは干潮ですよ。地盤沈下は80センチ。水は岸壁を越えて来るのではなくて、地下から来るのです。下水管を通して出てきてしまう。これは干潮ですよ。満潮だったらここに立てません。干潮で市街地がずっとこれなのです。どうにもなりません。

これは、「水産加工業は成長産業」と申し上げましたけど、ここは日本一の水産加工団地だったので。これがこんな感じなのです。地震、津波、火災、地盤沈下に遭いまして、どうにもならないという状況であります。現在、こういう感じなのです。海です。

それで、どうするのかという話があって、復興会議で市長が決断しまして、1メートル50かさ上げすることです。それにしても、まずやらなければいけないのは下水管を全部抜かないと駄目です。下水管をこのままでやるとまたこういうことが起こるから、下水管を全部抜くか完全に埋めるかして、1メートル50センチ積んで、そこから新しく下水管を入れる。ただし、それは道路と公有地だ



けですから、そこまでは金が出るらしいのですが。道はどうするのだということですが、何も決まっていない。だから、この辺の水産加工の人たちは、まず道路のかさ上げが終わらないと自分は何もできないということで、何年もかかりそうだということです。大変です。これが現実です。

冷凍庫は全滅しましたが、製氷工場が1つ無事だったので、何とか鮮魚だけやったのです。

日本の魚というのは、現在は大体6割ぐらいは冷凍です。冷凍しておいて、通年で加工します。そういう意味では、冷凍庫は全滅なのです。ところが、三陸の冷凍庫は全滅しましたから、冷凍の加工はできません。製氷の工場が幾つか残ったので、ここに1つ残ったので、鮮魚だけ揚げられる。だから、7月にカツオを揚げられたのです。これがなかったら、カツオも揚げられないです。

気仙沼というと、高知県お得意のカツオの最大の水揚げ港ですけども、「どうなのだ？」と思ったのですけど1工場だけ助かって、この氷があるので、鮮魚でカツオ漁を揚げられたということでもあります。ですから、加工用の冷凍用のものは揚げられない。多分、3月末ぐらいに冷凍庫が幾つか完成しますので、そこから少し復活に向けていく。三陸にとって、冷凍庫は生命線みたいですが全滅しました。それで今何が語られているかという、「海側に冷凍庫を並べていいのか」というふうな議論がありまして。「一部は内陸に置くべきじゃないか」ということが議論されていて、またそれが地元にとっては悩ましい話でもあるようでもあります。

造船ではだいぶ復活してしまっていて、鋼鉄製の漁船、200トンから500トンぐらいの船は、今、日本で造れる造船所は8つか9つしかないです。四国にはありません。カツオ船、マグロ船は四国では造れません。太平洋側で造れるのは静岡の三保と、それと気仙沼だけなのです。あとは函館と新潟の新潟鉄工。それから島根に1つ、それから長崎に3工場しかありません。ですから、カツオ船もほとんどこういう所で造られているというのが現状です。これはサンマ船です。サンマ船のエンジン修繕ですね。

この工場はかわいそう。この造船所はかわいそう。ご覧のように、こんなふうなレールが落ちてしまっているのです。地盤沈下してレールが落ちてしまって、折れてしまってサンマ船の200トンぐらいのものを修繕するのが一番得意なのですが、揚げられないのです。しょうがないので、クレーンでこういう小さい船をつっておいて修繕する程度しかできないということで、本当はまだとても戻ってないという状況であります。



これはちょっと面白い話なのですが、これは船大工のおじさんが、こういう養殖用の和船を修繕しています。三陸からずっと養殖漁業です。ワカメ、コンブ、それからホタテ、カキをやっています。そういうことをやっている漁師さんは、全部こういう船でやるのです。こういう船が約3万艘くらいあったのです。そのうちの80%は壊滅。どこかに流出してしまって、「無い」のです。かろうじて残った所の船を、おじさんの船大工さんたちが直しているということでもあります。9月ぐらいからやっていました。直しては海に入れる。こういう船ですね。エンジン付きのこういう和船で養殖をやります。

この場所は、満潮になると全部浸かってしまうのですが、かろうじてここまでは大丈夫だということで、こういうのができているのです。小屋が2棟と事務所が2つ。これは大船渡の方が寄贈してくれたのです。個人が寄贈してくれて、それでおじいちゃんたち3人で今修繕しています。電気もガスも水も来ていません。「おじいちゃんたち、何時までやっているの？」と言うと、「いや、4時過ぎから暗くなるから、それには帰らなければいけないよ」と言っている。「どんな感じ？」と聞いたら、彼は70歳前後ですけども、「これまで儲けさせてもらった。ここでお返ししなかったら、人間じゃないよ」と言って、彼らは頑張っている。こういうことも今始まっている。

これは、「イタバシニット」というニット屋さんの気仙沼の工場です。これはもらった写真で、3月14日です。

日本のニット産業というのは95%が輸入です。国産はほとんどないに等しい。この会社は本社が表参道にありまして、国内工場がこれ1つ。あと、インドネシア工場と上海工場という展開です。ここに

130人ぐらいおったのです。「どうだったの？」と聞いたら、「7メートルと言われたけど、来たのは17メートルだった」と言う。直後はこんな感じなのです。「従業員はどうだったの？」と聞いたら、130人が一応全員無事に避難したのだけでも、1人のご婦人が子どもを保育園に迎えに行き流されたということでした。

社長と通ったのですが、2日後に入ったときの写真です。ここを見て「うわ、駄目だ」ということで避難所に回ったら、住民たち、工員たちがたくさんいた。みんな集まってきて、「これから私たちはどうなるんでしょうか？」と涙ながらに言われて、70歳の彼はその場で「再開する」と宣言したのです。取って返して、まず必要なのはミシンと裁断器だ。この建物の外側に何か張ってほしい。つまり地元へ頼んで、東京に戻って即ミシンと裁断器を調達しなければいけないということで、まずミシンを準備したのです。連絡して70台、いろんなミシンを頼んだら、JUKIは何も言わず、「4月中に欲しい」と言ったら、4月末までにJUKIが70台きちんとそろえてくれたと。あと裁断器の方は、昔から付き合いのある日本のトップメーカーに頼んだというのです。そしたら「先に金をよこせ」と言われたということで、「そういう所とは二度と付き合わない」と言っていました。こういうときによく分かるということで、5月15日にはここで再開しています。再開した姿はこんな感じです。側壁を仮に打ちつけただけということで、この冬はどうしているか分かりませんが、一応再開した。



これは中国人研修生です。今回の被災では、基本的に全員帰したのです。向うがチャーター便を持ってきて、それで全員、新潟空港から返した。ここは30人の中国人研修生がいた。ところが15人残りたいという。残ったのはここだけです。彼女たちに「なぜ残ったの？怖くないの？」聞いてみると、「社長さんのために頑張りたい」。この人たちは期間労働力、この人たちがいないと困ってしまうのですが、15人残ってくれたということでもあります。



それで、社長に「よくやったね」という話をしたら、「やめる方が楽だ」と言うのです。「おれはもう70だぜ。ここでまた借金を背負ってやるというのはしんどい。だけど従業員もいるし、地域にも40年お世話になっているということだから、やるしかない」ということで彼は再開に持っていったということです。

その工場から海を見ると、1キロぐらいありますけど何も見えませんが、ここに建物がずらっとあったのです。既に引き波が持って行ってしまったということでもあります。

これは茨城県のひたちなかという町です。岩手県にはこういう場所はありません。地震の影響はむしろ、茨城県の方がひどいです。こんな調子です。

これは、そのそばの工場です。何ともなさそうに見えますが、中は駄目です。これは解体してしまって、整地されています。

ということで、地震の影響はむしろ、こういう茨城県あたりの方が大きいです。あるいは宮城県の内陸部とか、あのあたりの方が地震の影響が大きいということなのですが、茨城県のこれだけの被災はそれほど知られてない。なぜかという、茨城県にはテレビの支局がないのです。全部東京（タワー）なのです。これが福島まで行ってしまうと福島支局だけど、茨城に支局はありませんから、東京の記者は誰も行かない。だから、茨城のニュースは全く流通してないという悲しい現実があります。今はちゃんとやっています。

これは、南相馬市です。原発20キロ地点の検問所です。これは警戒地域の入り口でして、これは許可証がなければ入れません。私は今、福島の浪江町の復興会議もやっているのですが、1回中を見たいと

ということで、8月の中旬に許可証をもらいまして、20キロ圏に入りました。



ここから中には人が一人もないのです。これはコンビニエンスストアです。この左側が破られています。もう、コンビニは全てやられていました。ここは3月12日には誰もいませんから。幹線はああいう格好で検問所がありますけど抜け道はありますからね、知っている人は入れるのです。そういうことで、悪いやつが入ったのですね。普通の商店というシャッターがありますけど、コンビニはシャッターがないのです。24時間対応ですから一番やりやすい。1カ所穴を開けたら、あとは誰もいないですから、ATMは全て荒らされている。日本にはそういう人はいないことになっていますけど、実はいるということで、この20キロ圏のコンビニは全て破壊されていたというのが現実です。

入ると、こんな感じです。これは象徴的なのです。これは海岸のそばです。原発地域は原発汚染で話題になっていますが、実は津波に相当やられているのです。これは浪江の請戸という場所ですが、このあたりは580戸の住宅があったのです。住民は全員避難していますから、ここは人が入っていません。掃除もしてないですけど、きれいに流れて何もなし。全部、引き波で持っていかれたということでありました。ただし、庭の花は咲くのです。植物は強いと思います。

そこから見た第一原発の排気塔です。ちょうど6キロ地点でありまして、線量を見たら6マイクロシーベルトと、少し高いぐらいでした。

これは有名な写真ですけども、こっち側が双葉町役場です。ちょうど3キロ地点です。ここも6マイクロシーベルトですね。皮肉です。あのあたりを歩くと、こういう場面に出会うのです。人が誰もいないはずですが、でも、信号機はついているのです。つまり、第一原発の工事をしていますから、ある電気の系統は流れているのです。それに沿ったあたりの信号機が、人が一人もないのについている。あと、どこかにある消し忘れの自動販売機はいまだについているのです。そこに150円を入れてボタンを押すとペットボトルが出てくるという、何ともすさまじい現象です。余震がしょっちゅうありますので、こういった古い建物はじわじわ倒れるのです。

これは私の姿ですが、8月12日ですのもものすごく暑い。これは浪江の町役場の前ですけども、「ここへ来てタバコを吸うやつがいるか」と怒られましたけど、こんな感じです。

これはちょっと不思議な写真なのですが、浪江の町役場の駐車場です。車はかなり残っています。これは、12日に急に避難ということになりまして、バスか何かでみんな津島という所に避難するのです。同じ浪江の郊外、30キロ圏内です。車を置いていって、夏になっても取りに来てない。こういう状況であります。

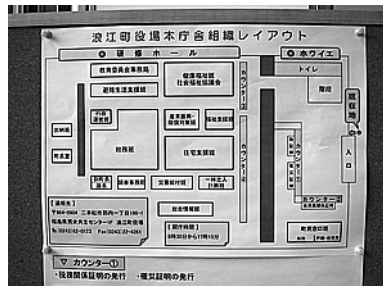
役場の中はこんな調子で、「ぐちゃぐちゃ」です。地震でひっくり返ったのです。とにかく12日には



避難してしまいましたので、我々はこの浪江の人と一緒に必要書類があったので、それで私も入ったということです。

田んぼは全部これですね、やぶです。

それで、20キロ区間を出ると一応測定されます。線量を足の裏まで測られて、一定の線量を超えると、その場で裸にされて除染されるということですが、私はセーフだったということです。



これは浪江の町役場、今は二本松市に仮に移転していますが、こんな混み合った感じで皆さん仕事をしているということです。普段見たこともない、「一時立ち入り計画班」とか「避難生活支援班」とか、本当に町役場も大変という状況であります。

これは福島に建てられた浪江の人たちの仮設住宅ですが、当初は、11月ぐらいまでこういう状況だったのですよ。そうすると、おばあちゃんが買い物にも行けないということで「ぎんぎん」言ってやったら、11月の初めに簡易舗装をしました。だから、トラックは無理ですけども、乗用車ぐらいまで何とか乗り入れができるという形に今はなっています。



これは、浪江の中に残されたそば屋さんです。こんな立派なそば屋さんですけど、放置されているわけですよ。



だけど、このおじさんは頑張りました。後ろ姿のこのおじさんです。今、原発地域は特殊な状況なのです。どういうことかという、ほかの所は失業保険などで対応するのですが、原発地域というのは休業補償が出ているんです。例えば先ほどのそば屋さん、月に100万円の売り上げがあった場合、100万円が出ているのです。60%は国が出して、40%は東京電力が出しています。100%出ているのです。ただ3ヶ月置きに見直しですので、1月の見直しがどうなったのか聞いてないのですが、いつまで続くか分からないと。だけど、少なくとも1月までは100%出ていたのです。そうすると、何かやって例えば売上が50万円上がると、その休業補償を50万減らされるわけです。やってもやらなくても同じなのです。これが今、大きな問題なのです。そうすると、人間の多くは「しない方がいい」と言うわけです。やってもやらなくても同じなのだから。だけど、私は「やるべきだ」と言ってたきつけて、この人が一番先に応じてくれて、7月1日にオープンしています。「やった方がいいですよ」ということで彼は始めまして、最初3日間、無料で100食ぐらい、「なみえ焼きそば」を提供したら、600食ぐらい出したと言っていました。7月に入ってからはお客さんがガンガン来てくれて、1カ月で4,000人来た。ここで浪江の人が交流し、それから二本松の人たちが来てくれるという形になっているという状況です。

これは、仮設住宅の中に造られた床屋さんと美容室です。11月ぐらいからこういうのができ始めています。でも、彼らも、やって売り上げが上がれば、先ほどの休業補償から引かれるわけです。でも、やった方がいいということで、こんな感じでやっていて、1日に何人来るかという4、5人ということで、来ない日もありそうだと言っていますが、やっぱり仕事はやるべきだということで、彼らは頑張っています。



これはNPOのやっているコーヒーショップですが、NPOの方が、立ち上がりが早いですね。NPOの人たちというのは不思議なことに、以前からほかの地区のNPOとの連携がすごくあります。だから、浪江のNPOがコーヒーショップをやっているだけ目だったのだけど、さっと二本松に来たら、さっと支援体制ができるのですね。だから、こういう所の方の立ち上がりの方が早いなということを痛切に感じました。

これは鈴木酒造店という、海から15メートルの所にあった酒蔵です。これは頂いた写真です。日本で一番海に近い所であったということなのですが、現在は、こうです。あの向こうは防満堤ですから、こんなことになってしまった。たまたま酵母の手前の主母を実験用に工業試験場に預けているということが分かりました。30才前の若旦那が、これはご先祖さまのおぼしめしであるということで、復活させると、昨年5月に福島のある蔵のたるを1つ借りて、7月に1回、一升瓶1,000本だけ出しました。だけど、どうも水が違うということで、できたらとにかく福島でやりたいということだったので、なかなかそういう場所がなく、結局いろいろなことがあって、これは山形県の長井という所の東洋酒造という蔵ですけど、ここを買収しました。それで11月から酒造りを始めて、12月の20日ぐらいには取りあえず一升瓶2,000本を出すことができたということなのです。



この、居抜きで入ったのですが、こういうことが成り立ったのですが、普通、酒蔵に居抜きで入るというのはなかなか難しいのです。



どういう仕組みかと聞くと、この東洋酒造自身がぼちぼち廃業したいということだったようで、情報を、試験場を通じて得て、それで折衝して、結局買い取ったのです。この東洋酒造自身がこれだけの資産がありますけども、逆に借金もあるという状況で、山形銀行が借金の方の面倒を見ていたのですが、借金と資産を相殺してゼロにした。それを鈴木酒造が買収したということです。従って、山形銀行の貸した分は、新しく鈴木酒造が背負うということです。だから、鈴木さんは山形銀行のことを知らないのだけどやってしまったということで、現金は1円も動いてないのです。こういうことでうまくいったということで、多分これは山形銀行の英断です。なかなか普通できないことなのだけど、こういう事態だということで、こういうやり方で処理したという、ひとつのモデルケースになり得るのではないかと考えて見えています。

これは7年ぐらい前の写真です。たまたま、何の意図もなく唐丹(とうに)という駅のホームから撮った写真なのです。ここに大村技研という母工場があるのです。これは釜石の北の方ですけど母工場がありまして、300人ぐらい雇っていました。金型屋です。これは全部流れてしまいました。これが全部消え去っています。取りあえず7月に、これは内陸の北上市が持っている貸工場、これを無料で貸してあげました。たった100坪です。ここで一応、仮に操業



を7月1日からやっています。大村さん自身も釜石で再興したいのだけど、釜石には土地がないんです。釜石に土地を手配するのは数年かかると言われています。待ってられないということで、岩手県の内陸部をいろいろと回ったけど、結局、これを借りた北上の、このすぐそばの場所に、これは借り工場の中ですが、今増設しています。先ほどの貸工場のそばに増設してまして、3月末には完成させる。

これは1月5日の写真です。3月末にはオープンする。11億円掛かります。これも先ほどの補助金がついて4分の3が補助されて、自己負担が多分3億円ぐらいになるでしょうけどやるということです。こどもやっぱり、実は周りに比べるとかなり速いのですよ。やっぱり、北上市がすごいですね。企業一で日本一と言われているのですが、全然サービスが違うというのです。北上がほかの市町村に比べて、北上のそういう対応が非常にいいということで、北上のこの場所に着手しますということで、ここは3月の末に完成するというのです。産業復興は大体、そんな感じで現在進んでいるという状況であります。

残りの時間、少しホワイトボードを使ってお話し申し上げたいと思います。よろしくお願ひします。

少し写真の説明が長引いてしまって、あまり時間がなくてあと十数分なのですが、幾つかお話し申し上げておきたいと思います。

四国にいと東北がどうなっているのかよく分からないかもしれませんが、東北というのはこうなっていて、岩手がこれですね。宮城、福島、茨城と、こうなっています。

今回の地震はこの辺で起きました。500キロぐらいということにして、ここから約数十キロですね。それで、この岩手というのはリアス式海岸でして、この辺までそうです。気仙沼、それから石巻の辺までがこういうリアス式海岸です。ここは津波でやられます。津波で、ここは水産系がやられます。これが大被害を受けていると。例えば、さっきの養殖船の95%は流出するとか、それから湾岸の設備は全て流出するという、深刻なことになっているのです。

それから、宮城県のこの辺が大体平野でして、津波によってどちらかという農業被害が大きいです。

福島は、第一原発がこの辺にありまして、これは津波によって放射能被害というやこしい問題が起こってしまったということです。

茨城県は、むしろ地震被害です。茨城からこの辺にかけては地震被害が多いです。

こういうふうに、1つの震災ですけれども、かなり場所によって中身が違う。これにプラス、地盤沈下とかさらに風評被害も入りまして、複合被害と言われているのですけれども本当にいろいろなタイプの被害がありまして、どうやって復興させてくるかというのが大きな問題です。

私の役割は産業復興とか中小企業復興ということですが、それぞれみんな違うということで、いろいろ見えています。

その中で幾つか大変興味深いケースがありますので、1つご紹介します。この茨城県の日立という場所がありまして、日立製作所の城下町という所です。この日立の隣がひたちなか。先ほど、ひたちなかの映像を少しご覧に入れましたけど、大体これは仲のいい市なのです。ここが、前企業城下町だったということだけでも、状況が変わりまして、もう日立に依存できないということで自立する中小企業が増えてきたのです。日立にぶら下がっていても生きていけない。そういう若い人たちを集めて、「ひたち立志塾」という塾を開いています。この高知県でも塾をやっています、昨日その卒業準備があって、今日もそのメンバーが何人かいます。日立で立志塾というのをやっています。

日立は、地震でやられました。何が問題になるかということ、特に製造業の場合、機械が倒れます。機械というのは起こしてやっても駄目なのです。水平を取らないと使えないです。工作機械というのは、それが非常に重要です。

かつて阪神淡路大震災の時にあったことなのですが、阪神の場合は大手がたくさんいます。三菱重工電機、神戸製鋼に川重（川崎重工）と、そうそうたる所を含めてたくさんいます。それで、例えば中小企業のおじさんが被災して何をやるかということ、まず家族の安否、従業員の安否に1週間の時間がかかります。1週間たって、一応それも片づいたので工場を始めないと駄目だねということで、機械がひっくり返っているから起こして水平を取らなければ駄目だということで電話すると、「何を言ってい

るの？もういないよ。遅いよ」と。こっちが全国のそういう技術者を全部かこっている。従って、来たのが一番遅くて1カ月かかっているのです。1カ月間でできなかったということになると、中小企業によっては倒産ということになり得るとのことなのです。

従って私、いろいろな所と付き合いがありますが、まずこういう被害が起こったときに社長が一番しなければいけないことは何かというと、それはまず機械技術者を確保すること。あるいは水平機、水準機を確保すること。そうしないと始められないのです。「何より先にそれをやってくれ」というふうに言っています。

そういうことがある程度各方面で理解されていまして、この連中もすぐ分かっています、もう3月11日に被災して即、この塾から全国の塾にネットで、「精密水準機を数十台欲しい」ということをネットで流しましたところ、例えば遠い所では岡山県の津山とか、それから宮崎県の延岡、それから東京の墨田区とか八王子と、こういった所に塾がありまして、15日には数十台が届いたのです。早かったですね。ただ、当時は宅配便が水戸までしか来ない。日立はもっと先です。ただ、このメンバーの1人に水戸の人がいまして、そこに全部集めてもらって、そこから個別に持ち込んで30台ぐらい入ったのです。それで、この関係者だけじゃなくて、日立、ひたちなかの中小企業全体の生計を1週間で取ったということで、1週間後には復活できたということです。そういったネットワークというのが、これからの日本にとって極めて重要ということではないかなと思っています。

ですから我々がよく言うのは、地元の異業種の集まりです。異業種であれば競争関係もありませんので、お互いに深く情報交換もできるし、交流もできると。同時に、遠くと同業種です。同じようなグループと付き合いしていくということが、災害が必ず起こるこの国におけるひとつの在り方ではないかなと考えています。

そういう中で、もう1つのテーマがあるなということでもいろいろ推進しているのですが、今回、1つ面白い話がありました。

固有名詞は言いにくいのですが、東京のお菓子屋さんがありました。工場が実は釜石にあるのです。ただ、新参者ですから、海側に土地がありませんので、当然高台を造成して入っていたと。だから、津波には遭いませんでした。ところが、しばらく物流が駄目です。物流が寸断されていて、材料も製品も送れないということで。ここはデパートや羽田空港など、いい所に出している会社なのです。欠品できないという状況になって、それで知り合いの鹿児島の実業家に翌朝電話して、「いくらでもいいから菓子をいっぱい作って入れてくれ」という要請が寄せられました。それに対してこっちのメーカーは、4月14日から22日まで、1週間ちょっと、毎日1万個のお菓子を羽田に空輸しています。そして羽田で受け取って、東京の菓子屋がデリバリーできたということがありました。これは「応援受注」とか「支援受注」と我々は言って、こういうことをやらないと、要するにもうこの会社は駄目になってしまうのです。1カ月後に立ち直って「もう1回やってください」と言っても「もういいですよ。ほかの所からとりましたから」ということで切られてしまうことが多いのです。「何とかその間をうまくつないであげることが必要ですよ」という話をしていました。「どうしてできたのですか？」と聞いたら、「それは、お互いをよく知っていたからだ」という。お互い、人間的にも社長同士知っているし、お互いの工場の中身も全部分かっていたという付き合いをしていたからできた。それともう1つ、「遠いからできた」と言うのです。「これが静岡だったら近過ぎて難しい。帰って遠いからできたのですよ」というような話がありまして、こういうふうなこともやっぱり考えておかなければいけない。さっきみたいに水平機とかそういうものをうまく支援することと、応援受注・支援受注をしてつないでいくということも必要だということがよく分かりました。

ただし、1つ問題が残りました。固有名詞は言えないのですよね。なぜかということ、問題が起こるからです。問題は中にあります。要するに、お菓子を生のままで売っていくのに、こちら側のお店で袋詰めしてデリバリーしたというわけです。まだ、これ14日ですね。袋に表示が付いています。いくら同じように作っているといっても、レシピはちょっと違います。だから、これは表示法違反になってしまっ

た。表示と少し違うものが使われているから当然です。同じものを使うわけがありませんから。それで、この名前は公表できないのです。まずいのです。ばれてしまうと表示法違反になってしまうということです。

こういうことも我々は学習しながら、さて、この商品のラベルはどうしていくのかということも含めて、考えていかなければならないということでもあります。

もう時間がありませんけども、原発地域以外は1日に1個でも動いているのですよ。1個でも動いています。遅々として進まないといえども、確実に動いています。

非常につらいのは原発地域でありまして、塩漬けです。どうにもならない。一步も動かないという中で、先ほど申し上げましたように休業補償という妙なものでかぶされていまして、やってもやらなくても同じだというようなことになっていて、多くの方は「やらない」ということになっています。それは良くないというのですが、そういう状況にあるということです。この人たちの復興をどういうふうに考えていくのかということが、これからしばらくの重大な課題であるということでもあります。

農協系の方がいますので話します。「周りに放棄地がたくさんあるから、借りてやったらどうだ？」と農業委員会で話をすると、「大歓迎だ」と言われるのです。そこで「何か農業をやってください」というと、「あなたは言われるけど、本当に俺たちがやったものを誰が買ってくれるのだ」と言うのです。彼らは風評被害を考えているのです。これがまた大きな壁になっています。でも「買わない人は99%いるかもしれないけど、1%買う」と私は言います。例えば、東京駅のそばに福島県のアンテナショップがあるのですが、そこは福島県のもものが売られていますよ。べらぼうに売られています。だから、一部の人は買ってくれるのです。取りあえずそれしかない。

逆に、生協さんに「どうですか？」と聞いたら、「福島と付いたら買う人はいない」という。「それは生協運動の何か問題じゃないの、教育が悪いね」という話をしているのだけど、「現状はそうだ」ということで、一番しんどいのは福島ということになる。何とかそこを払しょくしながら充実していったらいいということをしてこれから進めていかなければならない。

取りあえず1時間半で、まとまった話にはなりませんけれど、現場はこんなところに今あるということをご報告申し上げました。

どうも、ご清聴ありがとうございます。

(会場から拍手)

(司会者)

関先生、ありがとうございました。

それこそ、震災前後のリアルな映像から始まって、被災地の復興のために産業の確保という場をどういうふうに、できるだけ早く立ち上げ、再生するかという、そういう大変興味深いお話だったように思います。

それでは続きまして、黒潮町役場の友永さんから、友永さんが3月14日に現地に入られたということで、友永さんが撮られた写真が高知新聞にも直後からすぐ載りました。そういったことで「直後の気仙沼での自治体支援の体験から」ということで、実際に支援をされた体験報告をご報告いただきたいと思えます。

友永さん、よろしくお祈りします。

被災地支援体験報告「直後の気仙沼での自治体支援の体験から」

黒潮町役場 友永公生氏

(友永氏)

皆さん、こんにちは。黒潮町の友永です。

ちょっと準備しますので、お待ちください。座りっぱなしでしたので、肩をほぐしたりして、少し体をリラックスして待っていて下さい。

あらためまして友永です。よろしくお願いします。

私は、紹介していただきましたように支援に向かったということですが、さほど大した支援はできなかったという話になってしまいます。時間もありませんが、その辺はスライドを見ながらご説明していきたいと思います。

まず冒頭、このスライドをご覧くださいと思います。お手元の資料には載せておりません。今日は、お手元の資料はお持ち帰りいただいて、何かの参考にといつもりで持ってきておりますので、全てがそれに沿っていない話になるかもしれませんがご了承ください。

これは、私が現地から役場、あるいは県庁、高知新聞社の方にも送ったのですが、毎日送りました。というのも、私は何回か他の被災地に入った経験があったので、日々、被災地の状況が変わることと、自分の感覚も変わっていくということも少し経験していたので、とにかくその日のうちに、その日思った、見た、聞いたことを送るようにしておりました。

今日のお話ですが、このスライドの中に、この文字の中に全てが入っているのだと思っています。最後の言葉であります、「高知県の方にこの様子を知ってもらいたい」。そんな気持ちでしたし、向こうで知り合った多くの方が、「高知で私たちのことを伝えてください」。そういうふうに言ってくれたということです。今回、こういうふうには報告させていただけるというのは当時の約束が果たせるということで、とてもありがたいなと思っております。

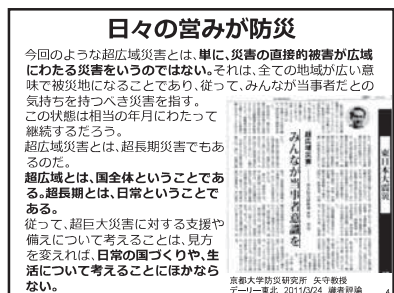
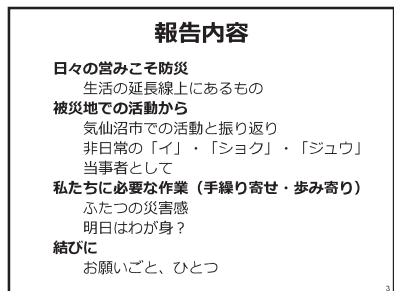
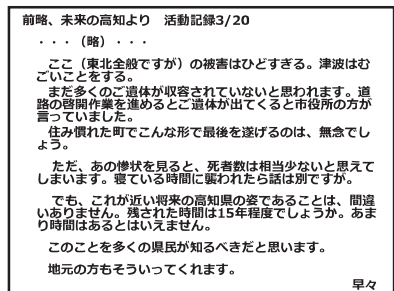
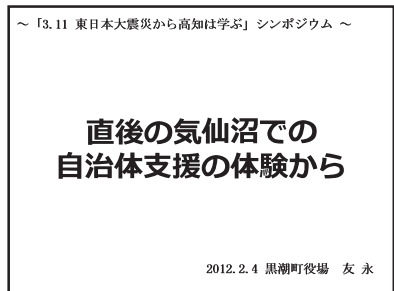
今日の報告内容です。

「日々の営みこそ防災」であるというお話です。私は長く防災担当をしていましたので、特に地域防災という視点でお話をするようになると思います。「被災地での活動内容から」ということで、感想を交えて報告をしたいと。それと、私たちに必要なことということで、お話をまとめて入りたいと思います。

ポイントとしては、日常であるとか、当事者ということ、あと必要な作業といいますか、「手繰り寄せ」と「歩み寄り」と書いていますが、こういった作業がひとつ必要ではないかと思っています。

「日々の営みが防災」だという話ですが、私は一介の地方公務員なのであまり説得力のある話がないので、京都大の矢守教授の言葉を引用します。

ここにありますが、矢守先生が3月24日に出した新聞のコメントです。ここに書いているように、「超広域災害」というのは単に面積的に広いからという話ではないということを描いている。そして、



「超長期災害」、長くこの状態は続くだろうということで、それは国全体が日常を考えていく必要があるということの意味するのだよ、ということが書かれています。ですので、日常の国づくりやまちづくりなんかを考えていくことに当たるのだよということになります。「みんなが当事者」こういった意識を持つ必要がありますということになります。

実際の気仙沼市での活動内容ですけれど、私の町は、この高知市からさらに百キロほど西に行った所にありますので、そこから目指すと大体1,400キロの長旅になりました。車で走ったわけですが、この会場にいます斎藤という職員と2人で向かったわけです。

気仙沼は宮城の一番北部、隣が陸前高田という位置関係にあります。こちらに行きました。帰りに少し栗原市の方も寄ってきたのですが、基本的には気仙沼市に4日間滞在したということです。

主な活動場所です。気仙沼の湾の奥の方に、少し山のふもとに市役所があるのですが、そちらを活動拠点にして、物資を青果市場にまず持って行って。あとは漁協のあたりで、少し荷物の陸揚げのお手伝いなんかをしてきたということです。

これが航空写真です。被災前と被災後ということで、湾の奥まった所にあって、先ほどの火災がひどかったというのは、この鹿折というあたりです。このあたりから火災が広がって、ここが一番ひどかったというような場所になります。



これが気仙沼の市役所です。大きく分けると3つの庁舎に分かれています。こちら、昔の尋常小学校。木造の古い建物ですが、ほとんど被害がなかった。地盤もいいという話でしたけど、山のふもとにこの本庁舎と、この「ワン・テン庁舎」というのはもともと「商業ビル」で、1、2階が庁舎で、その上は立体駐車場というような所です。ここの1階部分は浸水していましたが、本庁舎と第2庁舎については、揺れの被害もほとんど見受けられないような状態でした。

活動概要です。私たちの黒潮町と気仙沼市はカツオ漁つながりということで、結婚されてこちらでお住まいの方、あるいはこちらから行った方とか、ご親族がいる。またカツオの水揚げ拠点だということで、日常的な関係性がある町だということです。ただし、私の方はあまり水産の担当などしたことがなかったので、それだけ身近な町という意識が当時はなかったのですが、そういう間柄がある。

主な任務はこの2点ということで、ゆかりのある方の安否確認、それと、2便で町長と建設協会の方が来る予定でしたので、支援ニーズの調査をしるという内容でした。

取りあえず物資を持ち込みまして、担当の水産課長の判断で災害対策本部の傘下に入っていいですということで、一緒に活動させていただくことになった。こちらにあります小さい会議室なのですが、こちらで寝泊まりしながら活動させていただいたということになります。

これは現地入りしたときの装備です。これも何かの参考になればということで資料を付けております。基本的な考えとして、被災地に迷惑を絶対掛けないようにしようということ。自己完結ということで、トイレまで持参していったわけですが、実際は市役所のトイレを使わせていただきました。一番大きいのは情報機器の充実ということで、衛星携帯電話とかパソコンなどを持ち込んで、情報収集と情報発信に専念した。冬でしたので自分たちの体調を崩さないようにというようなことを考えての装備になります。

これが実際の現地での活動の様子ですが、市役所にキャンプ用のシートを敷いて、毛布を敷いて、寝袋を着て、その上にまた毛布を被る。初日の朝はマイナス5度ということで、とても寒い東北の洗礼を受けた気がしました。市役所の方がストーブを用意してくれたのですが、燃料がとにかくありませんでしたので、ほとんど使えなかったということがあります。そういう手厚い対応を受けて過ごさせていただきました。

パソコンと衛星携帯電話をLANケーブルにつないで、それでインターネットで情報を発信していたということです。

これが活動記録です。先ほど、石川さんが14日からというお話でしたが、14日に指示が出て、2日で準備して、16日に出発したというようなことです。その当時は年度末ということで、自分たちの町にも大津波警報が出ていた。その対応と年度末の事務処理で、まさかの「行ってこい」ということで、本当に緊急車両の登録などを全国の防災仲間にもメールして、「何か情報はないか」というようなことをばたばたしながら、2日でしたが真夜中まで事務処理して、何とか準備を整えて出発したということです。

その間、いろんな支援をしまして、この辺は後で、写真で説明しますが、3月26日に高知に帰ってきたということです。

これが、気仙沼市役所とは結果的に連絡がつかないまま出発したのですが、宮城県庁から私あてにファクスが届きまして、「どうも気仙沼の方は青果市場に物資を持ってきてほしいということだ。欲しいものは非常食、マスク、水、毛布だ」ということが分かりました。これだけを手掛かりに出発しました。

こちらは、一応緊急車両として使ってくださいということで送られてきましたが、こちらの警察署でできましたのでこれは使わずに、このファクスを頼りに北を目指すことになったということです。

これが持っていった物資です。1便、この黄色い部分と2便です。1便で予定通り毛布、水、食糧、マスク、それとアルコール製剤というようなことで、私たちの町に備蓄していたものをとにかく持っていくということで、これだけを積み込んで行きました。

現地に行きますと、既に毛布が余っていました。たった3日というふうに情報が変わるのかと思いましたが、「毛布はもうありません」ということで、ほかの、例えばおむつとか缶詰とか、そういったものを送ってもらうようにして、2便ではちょっと内容を変えて物資を届けました。

現地入りの装備

●車中かテント泊の予定で以下を準備

項目	内 訳
飲食関係	水(飲用、生活用水)、食糧、ガスコンロ等
通信機器関係	衛星携帯電話(3台:1台はドコモ提供)、トランシーバー、スマートフォン1台(ドコモ提供)、携帯ラジオ
資機材関係	発電機(ガス式)、投光器(蛍光灯式)、DC/ACインバーター、ポータブルナビ
事務用品	小型PC2台、プリンター1台、折畳式机、文具類
衛生関係	ウェットティッシュ、マスク、アルコール製剤、風呂票、仮設用簡易トイレ(テントハウス付)
その他	テント、毛布、寝袋、双眼鏡、カップ、長靴(踏み抜き防止)、皮手袋、軽道(80リットル)

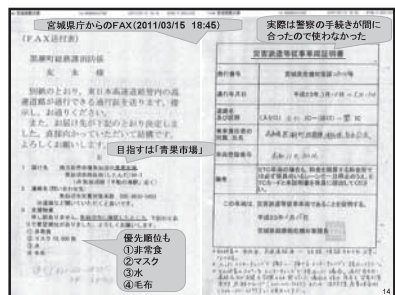
被災地に迷惑をかけない自己完結(アゴ・足・枕+トイレ)・情報機器の充実・健康管理の徹底



主な活動記録

日付	活動内容	備考1	備考2
3/14	現地入りの指示～連絡調整～緊急車両登録		
3/16	出発	第1便出発	
3/17	現着～町からの支援物資提供	第1便現着	
3/18	町関係者の安否確認等		第2便出発
3/19	気仙沼港にて支援物資の届届け支援等		第2便現着
3/20	気仙沼水産業対本館設立決起集会出席等 黒潮町建設協会寄贈のプレハブ設置		
3/21	被害調査(気仙沼市全般～陸前高田市)		
3/22	気仙沼港にて支援物資の届届け支援等		
3/23	浸水被害庁舎内の片付け支援		
3/24	気仙沼水産業対本館本部会議出席等		第2便帰町
3/25	内陸部調査(栗原市)		
3/26	帰町	第1便帰町	

※第1便＝町職員2名、第2便＝町長・建設協会から派遣2名



支援物資リスト

【提供物資と金額】 ※総額 すでに供給済だった

品名	単位	第1便	第2便	合計
毛布	枚	2,625	0	2,625
水	リットル	385,480	184,800	570,280
食糧(トイナース・A)	缶	0	1,600	1,600
食糧(トイナース・B)	缶	500	420	920
食糧(アルファ化米)	袋	300	150	450
消毒用アルコール	リットル	1,980	40	2,020
マスク	枚	6,500	28,580	35,080
除菌	リットル		15,136	15,136
おむつ等	枚		54,617	54,617
缶詰等(フルーツ)	缶		29,688	29,688
計		2,458,979	2,268,929	4,727,908

【備考】
●H18年度から備蓄していたので割と物資を持っていた
●新型コロナウイルス対応で、マスクや消毒用アルコールもストックあり
●ペットフード・ペットシート、カセットコンロ用ガスボンベ、携帯電話充電器(車のシガーソケットやAC電源等マルチなもの)
●衛星携帯電話3台のうち2台を貸与(滞在期間中)

出発前に想定した+αの支援内容

- 過去の事例から「情報がないということは、職員も多数被災し、庁舎も被害を受け、市役所自体が機能していない可能性がある」と想定
- 黒潮町関係者以外の安否確認の支援も踏まえ、以下のプランを立て、情報担当者で調整し出発

step1: 現地で住民リストの提供を受け
↓
step2: 衛星携帯のメールにて黒潮町役場にリストを送信
↓
step3: 黒潮町のホームページで公開

金額的に言うと、330万円ほどの物資提供をしたということになります。

出発前に、私の方が想定していたプラスアルファということでした。過去の地震の被災地の事例から、情報が無いということは、職員も庁舎も相当被害を受けているのではないかと考えまして、こういうふうに住民情報をいただいて、黒潮町役場に送って、黒潮町のホームページで公開して、情報のお手伝いをしよう。こういうことも少し考えを持って、情報の担当者と調整して出発しました。実際、こういう対応はせずに済んだのですが、こういう副案も持って現地に入ったということです。

これが、3月16日の出発式です。齊藤と私です。町長以下職員、また議会の開会中でしたので、議員の皆さんにも見送っていただいて出発したわけです。

この写真をなぜ持ってきたかという、出発しようと車に乗る寸前に、それこそまた齊藤さんという町民の方なのですが、1枚の紙切れを持ってきて私を呼び止めて、「これはうちのかみさんの両親なので、何とか探してくれ」と頼まれたわけなのです。この瞬間に、「あ、やっぱりそうなのだ」と私は気付かされて、本当に身近な町の話なのだと思われ、役場の職員として、当事者として感じられた瞬間でした。



黒潮町役場駐車場での出発式 2011/3/16



被災地までの道路状況 2011/3/16



被災地までの道路状況 2011/3/17



被災地までの道路状況 2011/3/17

それで、雪が降っている高速道路を走りながら、被災地がどんなものかということで心配しながら行ったわけです。

途中から緊急車両しか走れない、通行規制が掛かりますので、こういうパトカーだけ走っている後ろをついていくというようなことで現地へ向かったと。

それで、少し高速道路が修理されている様子があって、「ああ、ちょっとずつ被災地に近づいたな」ということを感じました。それで、給油制限がされたり、停電で信号がついていなかったりということがありましたが、過去に入った地震の被災地とはやはり風景がちょっと違う。家は倒れていないし、電柱も倒れていない。ちょっと違和感がありながら現地に入ったという記憶があります。

これが、一番初めて見た被災地らしき風景といいますか。青果市場が河川沿いにありましたので、その近くの光景です。何か、水害の被災地に来た感じがした、という感覚があります。

その日はもう、そのまま市役所の方に行きましたので被災状況は分からないまま、特に事務処理をしていて、私自身がテレビの映像などをほとんど見られないまま行っていましたので被災地の状況が分からなかったのですが、市役所の中でいろいろ資料を見せていただく中で、これが浸水エリアなのですが、「あっ、こんなに津波が来ているのですね」とか、これが航空写真、これが漁協なのですが、「こういうふうに火災もあってね」という話を聞いて、こういう写真を見せてもらって「ああ、被災地に入っ



市役所での情報提供内容 2011/3/17



市役所での情報提供内容 2011/3/17



市役所での情報提供内容 2011/3/17

てきたのだ」とあらためて思った記憶があります。

被災地で避難所の関係ですけど、93施設、1万9,000人余りの方がその当時避難しており、この中から、安否の確認をしていくという作業に入ったわけです。

気仙沼の被害の状況は、関先生の写真にもありましたけど、少し振り返りながら見ていただきたいと思います。

これが、私たちが初めて見た、一番津波の恐ろしさを感じた場所です。本当に積木のように、家のごろごろ転がっている。車が屋根の上に乗っている。そんな光景が延々と続いていた。特に港周辺部は船の被害がとてもひどく、火災の跡もありましたし、本当に信じられない光景ばかりが続いていたということです。また、ここは火災が鎮火しておりませんで、東京消防庁がずっと、24時間体制で警戒していました。他の場所は、ヘドロと油のにおい、水害の被災地に近いにおいがしていたのですが、ここは火災現場のにおいがずっとしていました。本当に、複合的な被害を受けているという話がありましたけど、まさにそうだなと感じた所です。

これが漁協の屋上からのぞいた、港周辺の町の様子です。

これは、気仙沼の市役所から少し南に行ったあたりなのですが、ここの辺の海拔、私の感覚的には7、8メートル、10メートルはないぐらいかなと思ったのですが、ここの松を見ると枝が折れているということで、ここに斉藤君に立ってもらって写真を撮ると、こんな高い所まで津波で枝がもぎ取られていたということで、本当に津波というものの認識不足を思い知らされた場所でした。

少し災害対策本部の状況をお話ししたいと思います。

気仙沼は、広域の消防組合と市役所の2つの災害対策本部があって、市役所の災害対策本部は朝6時にミーティングが始まって、大体夕方6時でその日の活動が終わる。ただし、避難所に配置されている方は24時間といいますか、36時間勤務で交代をしていた。夜6時に帰って、朝6時に出てくる、というような繰り返しをしていたということです。



被災当時は、スタッフに提供する食糧がなかったということで、「備えは考えなさいよ」というような声も掛けていただきました。本当に家が流出している職員もたくさんいましたので、役所に寝泊まりしながら災害対応に黙々と当たっている姿が印象的でした。

これが災害対策本部のある、危機管理課の中に撮影は控えておりますが、こういうふうには災害対策本部を立ち上げていた。

こちらが朝のミーティングです。これは本庁舎の方ですけど、100人以上が本当にぎゅうぎゅう詰めでミーティングをしている状況です。節電のため、電気をつけない中でやっていた。

その会議が終わりますと、そこが食堂になります。休憩室にもなりますし、寝室にもなります。ですので、災害現場から戻ると足元が汚いので掃除もしたりしながら、ここでずっと寝泊まりしていたというような状況になります。

これが水産課のシフト表です。みんなで工夫しながら、この日は泊まって、この日はどうのこうのということ、それぞれの部署が役割を決めてやっていたということです。それで、こういういろんな情報が張り出されていた。

私たちの実際にした支援活動の様子を少し写真で報告します。これは斉藤ですけど、避難所に行って名簿を見せていただいている様子です。市役所の中の名簿だけではどうしても分からない部分がありまして、こういうふうには避難所まで行って確認をするという作業をしました。

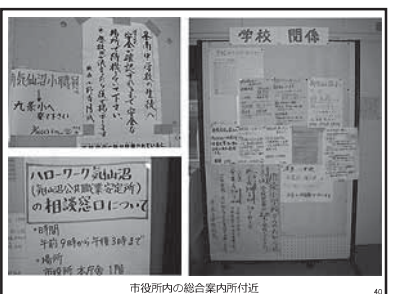
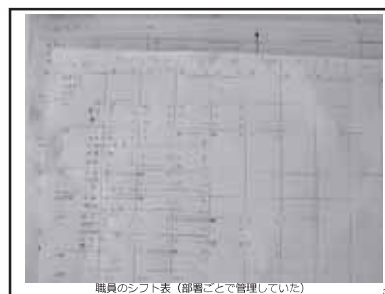
そのほか、これは水産庁から、このとき軽油が280個入ったんですけど、それのお手伝いをしている。満潮になりますと浸かりますので、時間を見て撤収する。地震情報や津波情報が出たら危ないのということで、その辺注意しながら、とにかく物資を何とかしたいという思いで、危険を冒しながら、職員の皆さんが対応をしていたという様子です。

そういった状況でも自衛隊の機械力と組織力は早くて、とんでもなくスピードが速く荷物がはけていく。私たちもやることなくばう然と見ているような感じで、やっぱりすごいなと思った光景です。



災害対策本部の概要

- 広域事務組合の災対本部（消防、警察等が中心）と市役所内の市災対本部が離れた場所でも共存
- 主な流れ
 - 06:00 全職員によるミーティング
 - 06:30 各課等でのミーティング
 - 07:00 主に避難所の運営や物資の受け取り業務に従事
 - 18:00 部長会議
- 基本的には36時間従事（避難所運営が本部での待機）、12時間の休憩でローテーション
- 住民優先、被災初日はビスケットが1枚、2日目おにぎり1個、3日目子どもの握りこぶし大の菓子パンが1個など
- 避難所が庁舎内にあることや住民への配慮で、節電や節水に気を配っていた（ミーティング時も懐中電灯で）
- 家屋が流失した職員は庁舎内で寝泊り、家族を失っていても業務に従事
- 3/21からは通常業務への対応への動きも（問合せなど）



こちらは、黒潮町の建設協会が運転手さん2人とこのトラックを貸していただいて、このプレハブの事務所を寄贈するというで持ち込んだものです。実際は、炊き出しの食料を入れる倉庫に使っていただいた。今後は、また別の用途で使っていただけるというお話があります。



市役所や避難所での安否確認の様子 2011/3/18 42



地震沈下の影響を受け、280相除揚げの予定が実際で浸水の危険があり、150箱で打ち切り
タンクローリーが被災のため、ポリタンクからドラム缶へ詰め替えている様子
物資(水産庁からの経油)搬入の様子 2011/3/19 43



自衛隊の組織力・機械力に圧倒
物資搬入の様子 2011/3/22 44



黒潮町建設協会会館のプレハブ第2号で搬入した支援物資の輸送コンテナの搬入も果たした
プレハブの引渡し(炊き出し用の食材置き場として利用 新月中学校) 2011/3/20 45



浸水したワンテン庁舎内 2011/3/23 46



大人の背丈ほどまで浸水
認知症などで管理していた共有サークル(浸水被害(業者)に報告を依頼する等)
主に通簿などの簿籍帳簿類(簿籍(登記簿や歩留など))
魚が入っていた机とその魚
浸水したワンテン庁舎内から必要書類を救出 2011/3/23 47

これは、ワン・テン庁舎の被害を受けた役所の中です。「児童福祉係」と書いていますが、こういうふうにも何もかもめちゃめちゃな状況です。

こうした中で、特に水産の部署は工場の被害額を積算しなければいけないということで、設計書類をまず、取りあえず引っ張り出そうというお手伝いをしていました。本当に自分の席が元あった場所には全然ない所であって、書類がどこにあるかから始めるような作業でした。こういうお手伝いを少ししてきたということになります。

これは気仙沼の市長さんですけど、荷物を開けた後に一緒におむすびを食べている写真です。市長さんも現場にいろいろ顔を出しながら、災害対応を進めていたということになります。

「住民生活の状況」ということで、3月23日ぐらいになると給油所(ガソリンスタンド)が開き始めて大ラッシュが起きます。そうすると、災害車両の通行にも支障を来すということで結構問題になっていました。店が開く何時間も前から何キロも並んでいるというような状況があって、この辺の対策を苦



物資搬入の様子 漁協の差し入れ 2011/3/19 48



燃料供給が始まったが、給油待ち車両の大渋滞が問題化 2011/3/23 50



再開した銀行に並ぶ人々 2011/3/22 51



車両による販売所 2011/3/17 52



店に残っている商品(と恐われる)で営業再開 2011/3/22 53



市役所付近の病院 2011/3/20 54

慮されていたということがあります。

銀行も開きだしました。多分内陸の方だと思うのですが、青空市みたいな形でものも売っていただいている様子や商店の品物も少しずつ出始めたという風景がありました。

これは病院です。カルテか何か浸水したものを干していましたが、こういうふうな姿があって、少しずつ生活感が見え始めたかなというのが3月20日前後でした。

これが3月20日ですけど、水産業の災害対策本部を立ち上げようということで、漁業関係者300人ほどが集まって会議をしている様子です。

これは3月24日に、どういう体制でやっていくのかという、もう少し具体的な話をしている様子です。少しお手元の資料は見にくいと思いますが、組織体制とか当面の目標とか、そういったことが議論されて、6月1日にカツオの水揚げを目標に進めていこうという話でした。

「課題ごとの雑感」という所は、ここは飛ばさせていただきます。いろいろな問題があったということで、また持ち帰って見ていただければと思います。

「活動を終えて」ということで、少し感想的なことを話させていただきます。正直、私は行っていいのかどうかということをしごく悩みました。住民感情は分かるし、上からの業務命令ですので行かないという話はないのですが、本当に行ってもいいのかどうか分からないという気持ちがありました。

まず、受け入れ体制のことなどありますので迷惑じゃないかとか危険区域に入っていくのかというのもありました。

県庁の方が「もうちょっと状況を見てからにしよう」ということで、待てという指示でしたので、その辺で心の整理がつかなくて。阪神・淡路のときに被災経験のある友人に電話したら、彼女は即答で言いました。「絶対喜ぶから、行ってあげて」と。自治体職員、同じ仲間が来てくれたら本当に喜ぶと彼女が言ってくれたのが自分の後押しになって心の整理をつけて出発したという思いがあります。それと、避難所に居ない方の安否確認が本当に難しいなと思いました。

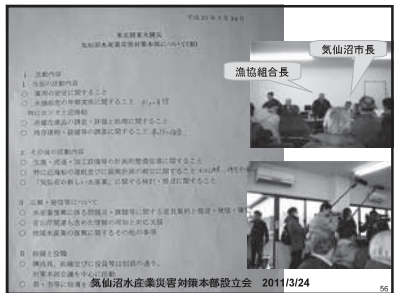
これは出発前にメモを渡してくれた斉藤さんのお話なのですが、避難所に居ないので分からないのです。それで市役所の方に聞くと、「あの辺は微妙な高さだね」というようなお話もあって、とにかく家まで行きました。そしたら、無事に居ました。本当に良かったと思っし、衛星携帯電話で黒潮町のご家族と話をしてもらっている姿が、本当にささやかだけどもお手伝いできたと思えた瞬間でした。

こうした対応は、被災地ではなかなかできないことだろうと当然ながら思いましたし、それと、やはり事が起きてからやろうとしてもできないことであったな思いました。自分たちの町の備えが今回生かされたというのが、1つ感想としてあります。逆に言うと、備えてない人間は人を助けるなんて話にはならないと思ったわけです。

ただし、もう少し応援協定や具体的なルールがあったら、もっと突っ込んだお手伝いできたのではないかと思います。それを「3ない支援」

「3ない」支援の現実

- 「協定等の根拠」「専門的技術」「経験的・制度的知識」がない支援部隊
- 水産課を通じ、危機管理課長や市長に挨拶は済ませ全体ミーティングに参加するも・・・
- 「外部者がいる」「狭いので遠慮願う」
- 「外部に出せない内容は話していない、勉強になるだろうから参加していいよ」
- もはや見物人に過ぎない? ⇒ 情報発信に軸足をシフト
- 支援担当である高知県庁や高知新聞社にメールで情報を出し続ける
- 被災初期の混乱期に現地入りできたのに、自治体の仲間としてしてもっとできることはなかったか? (行政マンでないといけないが、気仙沼市職員でなくてもできること)



活動を振り返って

- 「行っていいのか?」出発前の迷い(迷惑ではないか・土地勘ない・被災状況不明・危険区域で行動制限がある・本当に何かできるか・同行の意見を無視していいか)
- 「行ってあげて」の言葉(元神戸市職員との友人)
- 避難所にいない方の安否確認の難しさ(出発前に名簿を託した家族の思い・・・家庭訪問したお宅で無事を確認、衛星携帯でご家族と話をしている姿)
- 被災地外部からの安否確認ニーズまで被災自治体に対応はできない
- 事が起きてからでは勝負できない世界 ⇒ 己の備えは他者への支援につながることを理解(物資・資機材の備蓄があったからこそ可能な支援)
- やはり応援協定などの根拠や事前の取り決めは必要

有効な支援を可能とするためには

通信の問題 → 関係性の問題 → 地域性による被災内容の違い

情報の集約・統制

- 「連絡が取れれば助けられる相手はいるのに・・・衛星携帯電話は助かったよ」(水産課:熊谷課長)
- 需要673人:供給2600人
町村会の集計では支援不要のはずが・・・後日、仙台市に派遣
- 被災地に入れない民間事業者(指定品目の縛り・行政の持ちえない技術はあるが信用が・・・)
- 「無被災の世帯も多い、産業基盤の復旧なくして気仙沼の復興はない」(菅原市長の言葉)
- 災害時の「医」「職」「住」そして「移」・・・(毛布より燃料の例)

と私は呼んでいます。「根拠もない、技術もない、知識もない」ということで、こういう支援部隊に一体何ができるかという迷いの中で現地に入ったわけです。市長まであいさつして顔通したのですが、ミーティングの中で「部外者がいる」という話が出たそうで、1回、会議に参加できない状況でもあったのですが、「勉強になるから入っていいよ」ということで、そこは割り切って入るようにしました。そのうち面識もできて、普通に関係性が取れたのですが、初めは少し混乱もあったということですね。あまり踏み込んだ対応は必要ないだろうということが分かりましたので、とにかく情報を出していいということに専念をしました。冒頭申し上げたようにメールで写真とか、いろんな思いを発信し続けたということです。

ただし、あんな時期に入れたのに、もっと何かできたことはなかったか。これは今でも反省点として持っているところです。行政マンでないとできない。けれど気仙沼市職員でなくてもできたことはあったのではないかと、後悔の思いがまだあります。

有効な支援ができなかったなという反省から、ではどうしたら良かったのだろうと少し考えますと、これは水産課長のお言葉ですけど、「連絡が取れたら助けてくれる相手がいるのに」ということがありました。水産庁ですとか漁業関係者です。ただ、「連絡を取る手段がないというのが本当にもどかしい」というお話がありました。

それで「需要」と「供給」とありますが、全国に町村会というのがあります。町村が加盟している団体です。町村会の方では673人の「行政支援がほしい」という話があって、全国の町村で2,600人、県は挙げたのですが、「余ったので、黒潮町さんは今回いいですよ」という話がありました。実際、仙台市長会の方から逆に「来てくれないか」という話があったりと、いろんな情報が錯綜していたのではないかと思います。

それから民間事業者がなかなか入れない。物資も持っている、技術もある。けど、なかなか被災当初というのは、混乱を避けるために入れられないという状況もあった。県庁の方でも聞きましたけど、いろいろ物資を提供したいという申し出があったのですが、この指定品目ということで、決めたものしか送らないというルールで当初は動いていましたので、それに当てはまらないのでお断りしていたというようなお話もあります。

また、気仙沼の場合は「産業復興なくして町の復興はない」というお話も当初から市長さんはされていたといいます。

それと、ここに「災害時の『イ』『ショク』『ジュウ』」とありますが、今回はこの移動の「移」というのが問題になっていたと思います。寒いだろうからと毛布を持っていったのですが、「いやいや、毛布より燃料だよ」というような現実があったということです。こういった問題が、いろいろまとめていくと次につながるのではないかと考えているところです。ただ、助けてくれありきの防災というのはちょっと方向性が違いますので、有効な支援ということで考えていくべきだろうということです。

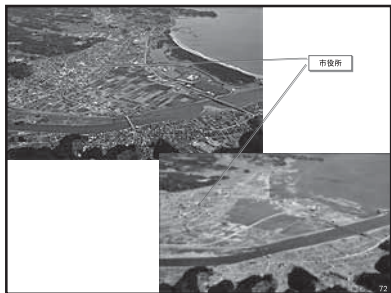
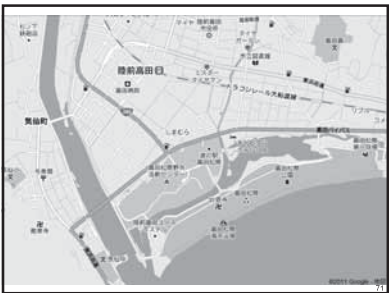
「医（移）」・「食（職）」・「住」という言葉が出ました。大きい災害のときはこの医療、職業、住居の問題が必ず出てきます。今

非日常のイ・ショク・ジュウ

- 医療・移動（人・モノ）・移転
- 職業・職場（シゴト）
- 住居・住環境・住まい方

暮らし

**当事者として
（陸前高田市の被害状況から）**



回の場合はこの「移動」という問題、それと、互いの家の移転という問題もあります。こういう暮らしにかかわることが大きな問題として、やはり立ちはだかったなというふうな感想を持ちました。「当事者として」ということです。

これは陸前高田市での感想になります。こちらは地図ですけど、海岸線から約1キロ入った所に市役所があります。松原が、高田松原ですけどあって、という地形です。

これが被災前、被災後ということで、国道45号線までかなりの距離、400メートルから500メートルぐらいは浸食されてしまったという場所です。

これが45号線です。もともと海岸線ではなかった所が海岸線になっていると。大きい津波が来ていたのだということがはっきり分かる場所です。

そういう被災地に入ると、こういうふうに建物がなくなって場所が分からないので、こういう立て看板がよくあります。気仙沼でもそうでしたけど、こういう光景があちこちにありました。

消防庁舎も被災し、学校も3階まで被災していた。市役所も4階まで被災していたということで、ここでも自分たちの認識の甘さを痛感したわけです。

一番その思いが強かったのが、この市民体育館であります。こちら、階段が36段から8段ぐらいあって、大体7メートル上がるとして地盤が3メートル、それは大体10メートルという場所です。松原があって、普段は海が見えない、海岸線から1キロ入った場所。町も直感的に、間違いなく避難場所だったなと思いましたが、自分も多分、避難場所に指定しただろうと思いましたが。ここで、後で新聞の記事で確認しますと、80人くらいの方がやっぱり避難して亡くなってしまったという場所です。本当に何か、何とも言えない空気が流れていたと今でも思います。体育館の中はこういう状況で、車が散乱していたり、



陸前高田市 (R45の被災状況) 2011/3/22 73



陸前高田市 (寸断されたR45復旧状況:仮設橋設置現場) 2011/3/22 74



陸前高田市 (寸断されたR45復旧状況:仮設橋設置現場) 2011/3/22 75



陸前高田市 建物が無くなり場所が不明なため看板があちこちに 2011/3/22 76



陸前高田市 消防本部周辺の被害 2011/3/22 77



陸前高田市 気仙小学校の被災状況 2011/3/22 78



陸前高田市 市役所庁舎の被災状況 2011/3/22 79



陸前高田市 市民体育館正面より 2011/3/22 80



陸前高田市 市民体育館より海側を撮影 2011/3/22 81



陸前高田市 市民体育館 内部の被災状況 2011/3/22 82

壁がなくなっていたりというような状況でした。

この市民体育館の看板ですけど、「避難場所」と書いていたのでもたまたま写真を撮っていて、体育館から200メートルぐらい離れた場所で撮ったのですが、後で写真を整理して「あ、あその看板か」ということで、「やっぱりそうか」と思ったことです。私も防災担当としての現地入りでしたので、そこでの当事者意識ということです。

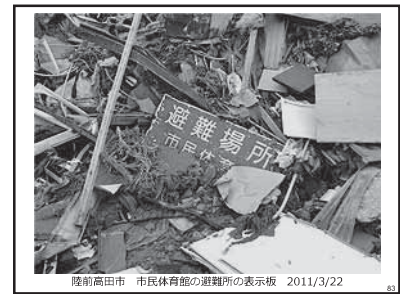
水産課長といろいろ話す中で、今でもよく覚えているのが「想定を超えたら終わりだよと言っていたら、本当に終わっちゃった」という言葉があります。これは裏返すと、「科学的根拠とか、1000年災害じゃなくて100年災害でいいのだ」という想定があって、「それに従って対策を進めていたら大丈夫だと思っていたのに」という言葉だと理解しています。本当に自分たちも、そういう対策をしてきて、「終わる」という意味の重さがすごく心に残った言葉でした。本当に自分の未来を、わが町を見るような感覚と、自分が指定した避難場所で犠牲者を出してしまったという錯覚に陥りました。これはもう

完全に当事者になった感覚だと思うのです。これは帰ってきてから自分の気持ちを整理する中で気付いたのですが、友達にメールをしたら、ある方が「あなたは二次受傷しているから気を付けなさい」というメールが来ました。どうもそういうことだったのだろうと今になって解釈しています。本当に申し訳ないという思いで現地を見てきたことでした。

こういう状況で、本当に、初めは「(水が) 3階まで来ている」、「4階まで来ている」と、津波の高さばかり目で追っていたのですが、陸前に入ると本当に足元ばかり見ていました。「まだ、絶対いるよね」ということで、みんなでぶつぶつ言いながら、足元ばかり見ていたという記憶があります。

恐らく、昔は干潟です。私の町もそうですけど、本来ですと人間が住む場所ではなかったのかもしれない。けど、その人たちに何の罪があるのかと、本当にもどかしい思いがありました。本当に無念でたまらないだろうと思いましたが、自分のしてきたことが本当に否定されたというか引き割かれたというか、自分が甘かったなと思知らされたことでした。

相当打ちひしがれていたのですが、現地で出会った方が口をそろえて言ってくれたのが、「高知も大変なのでしょう？」それと、「高知で伝えてください」という話。この言葉が本当に救いであったと今でも思っています。



防災担当としての当事者意識

- 「想定を超えたら終わりだよと言っていたら、本当に終わっちゃった・・・」水産課長の言葉
- 未来のわが町を見るかのような感覚と自分が指定した避難所で犠牲者が出たという錯覚・・・完全に当事者と化した
- 引きずり出したい思いで「おらんかあ、おらんかあ」と、つぶやきながら足元や建物内部を見て回っている自身に気づく
- おそらく昔は干潟、人間が住んではいけない場所
- しかし、自然の恵みを受け、自然とともにここで暮らしてきた方たちに、何の罪があるのか？
- 住み慣れた町でこんな形で最後を遂げるのは無念極まりない
- これまでの積み重ねが引き裂かれ、認識や想定「甘さ」と行動の「軽さ」を突きつけられる
- 「高知も大変なだろう？全部揃って、高知でたくさんの人にこの様子を伝えてくれ」

私たちに必要な作業 (手練り寄せ・歩み寄り)

作業① 2つの災害感を意識する

- 防波堤的災害感と
- 沈下橋的災害感
- 沈下橋はなぜ「こわい」のか
- 自然に近いほど自然の偉大さ(豊かさ・怖さ)を知る・感じられる
- 暮らしを守るために築いてきた自然との距離(堤防や堅牢な建築物など)で、便利になり安心感は高まった
- 本質的に安全になったわけではないのに、安心していいか

作業② 当事者意識をもつ

- 明日はわが身で本当にいいか？
- 人間は忘れるし、日々の営みを優先するもの
時間ない、経費ない、余裕ない・・・続かない
- 寺田寅彦氏「津波と人間」より
…37年といえは大きくも聞こえないが、日数にすれば1万3千505日である。その間に朝日夕日は1万3千505回ずつ平和な浜辺の平均水準線に近い波打ち際を照らすのである。…そうして運命の1万数千日の終わりがしのびやかに近づくのである…
- 「人間界の人間の自然現象」…本当に備え続けられる？

じゃあ、今後どうしたらいいのかということ少し考えたいと思います。私たちに必要な作業ということです。これは少しお願いにもなるのですが、2つの災害感というものを意識してもらいたいと思っています。これは私の造語なのですが、「防波堤的災害感」と「沈下橋的災害感」という考え方です。

沈下橋はなぜ怖いのかということがあります。少し増水しただけで、歩いて渡るととても怖いのです。それは自然との距離が近いということですので、そういう意識を持って、自然との関係をもう1回考え直す必要があるだろうということです。堤防の向こうで、こんなうねりがあるのですが普段は見えないので、さも安全になったような錯覚に陥ってはいはしないかということです。安全であることと安心で

あることはまったく別物だということも、ちゃんと意識していく必要があるだろうということです。

それと、やっぱり当事者意識です。「明日はわが身」というテーマが今日の中にもありますが、本当にそれだけでいいのかなどどうしても思ってしまう。長く防災をしていたので、いろんな方とそういう取り組みをする中で、どうしてもこういう現象が起きています。今回の震災を受けて、みんなの意識は相当変わっていると思いますけど、本当に続くのだろうかという疑問がどうしてもあります。

これが、寺田寅彦さんの有名な随筆の中にもあります。「人間界の人的自然現象だ」というふうな指摘もあります。どうしても人間というのは日々の生活に追われて、どうしてもおろそかになってしまう。ということを経験した上で、考え直す必要があるだろうということです。

それと、もう1つの作業として、自分たちの暮らしに置き換えてみようということです。それが当事者意識を持ち続けるためのひとつの手段ではないかというふうに思っています。

「その後の気仙沼は…」ということで、ひとつ手繰り寄せの作業をしてみたいと思います。

これは11月に私が行って撮ってきた写真ですけど、関先生が言われたように、まだ海のような状態です。地盤沈下していますので、鉄板をかき上げて港を運営している状況ですとか、これは向こうで知り合った友達の家が合った場所なのですが、海のような状態。それと、道路もこういう状態です。

また、これは向洋高校という場所ですが、新校舎はこちら（画面右側）にあります。旧校舎、新校舎とも被災して、別の場所に移転計画が出てきておりますが、そのままの状態です。

この、がれきの山の問題もあります。これは加工施設の写真ですが、こういう状態がそのままになっている。

なぜかという、どうしても気仙沼、宮城の場合は建築の制限が掛かっていますので、再開発ができない縛りがあると。修繕はいいのですが、修繕でお金を入れると、そこが道路になったら二重投資になるとかいろんな問題があって、なかなか一歩を踏み出せないという縛りがある。市役所の方に聞くと、

作業③ 私たちの暮らしに置き換える

- 当事者意識をもちつづけて備えるために
- 手繰り寄せ・歩み寄り
- 災いとは？

その後の気仙沼は... (手繰り寄せ)





次に進めないことの弊害

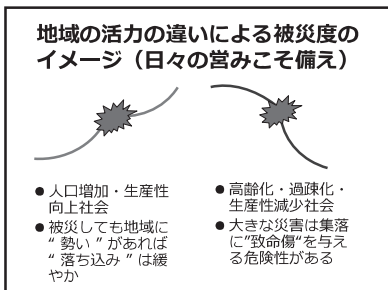
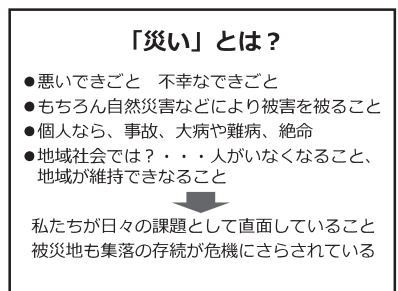
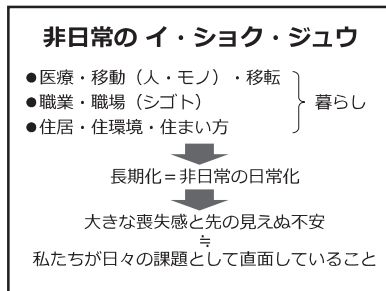
- 「6月からのカツオ、サンマの水揚げはまだしだった…」
- 建築制限の課題（修繕はいけど…）
- 加工場が再建しないことの重大性
- 秋以降の見通しが無い
- 職人・技術屋が流出する危険性
- 移転はやむなしとしても、土地は買い上げてくれるの？（当面の現実的な話が見えない）

やっぱりもうこのチャンスにきっちりした町を造らないといけないということでのとらえ方もあるので、どうしても生活者にしたら、「なかなか目先のことも見えないというしんどさがある」というお話でした。

これは商工会の会長さんにお話を聞いたのですが、何とか鮮魚は大丈夫だったのだけど、加工施設が再建しないと、職がないため職人が出ていってしまうということが問題なり、本当に危惧（きぐ）しているというお話がありました。一般の方に聞くと、「移転しなければいけないのも分かるけど、では、うちの土地は買ってくれるのだろうか」とか、そういった本当に具体的な話が無く、前が見えないというお話があります。

先ほどの「イ」「ショック」「ジュー」の問題ですが、これが長期化している。非日常の生活が日常化してしまっている状況がある。これが、大きな喪失感と先の見えぬ不安を招く。これを、私たちの生活の中に置き換えることが多少できはしないか。本当に少子高齢化とか、なかなか厳しい地域にある中で、重なる部分がありはしないかということを考えてみたい。

それと、「災いとは何だろう」ということを考えたときに、地域社会で考えると、その地域がなくなってしまうことではないだろうかということがあります。これも、やっぱり私たちが日々直面している話であって、被災地でも集落の存続が危ぶまれている。そんな地域もあるということに思いをはせてみたいと考えます。



通い合うことを見出す(手繰り寄せ)

- 少子と超高齢化にあえぐ地域社会と被災社会
- 一方で通用することは、他方でも通用する可能性
- 故に、東北の今の歩みに学ぶべきというのは、単にいずれ被災する地域だからではない
- 「明日」ではない
- 私たちはすでに当事者・・・相互に生かせるものがきっとある
- 疲弊しないため地域を維持・守るためにしていることこそが備え
- 日々の営みこそ防災

**ひとつの例として...
(歩み寄り)**

これが被災度のイメージということです。右肩上がりであれば、ある程度インパクトを受けても落ち込みは緩やかだけど、逆の状態であれば、本当に致命傷になりかねないということがあります。こうならないためには、日々の活力、地域の元気をつけていこうという取り組みを私たちはしているわけで、そうする作業が今の東北で行われていることに重なることがあるのではないかと。そういう通い合う部分がきっとあるだろう。

この地域と、今の被災地域の地域社会の問題で、一方で通用することが、反対に向こう側でも通用することがあるのではないかととらえてみたい。東北に学ぶべきことは、「いずれ被災するから」という意味ではないと思っています。自分たちは既に当事者なのだのととらえないと、やっぱりつながらないと

いう気がしています。ですから、「日々の営みこそ防災」。一番初めに申し上げた言葉に帰結していくのではないかと考えています。

1つの歩み寄りの例ということで、手前みその話になりますけど、黒潮町のNPO砂浜美術館というのが、「かつおTシャツ、北へ向かって、くろしお発せぬま行き、ここはひとつ!!」ということで、「かきくけこ計画」ということで応援プロジェクトを進めています。ほかの日曜市のマーケットのメンバーと共同でやっています。私たちの地域を元気にしていく仕組みを、今の被災社会の元気を取り戻すことに使えないかという試みだと私は理解していますが、歩み寄りの作業もひとつ考えてみることでよかったらいいのではないかと考えています。これは随時受け付けているので、興味のある方はホームページなどでチェックしていただければと思います。

「結びに、お願いごとを1つ…」ということで閉じていきたいと思います。これは関先生が入っている気仙沼の復興計画です。このテーマがとてもいいなと思って紹介します。本当に、海と生きていくという覚悟なのかなととらえます。

この中には、私がお願いしたいことが含まれているように考えます。それは何であるかという、やっぱり地域が好きであることだろうということです。「やっぱり地域が好きであったら、本当にどうしようもない不安な要素があるけど、でも何とかしたいよね」。こういう考えにきつとなるはずなのです。ですので、地域防災というものも本当に同じで、「何とかしたい」という原点というのがここにあるわけです。あえて「さんずい」を使って「源点」としてありますが、「源点にして頂点」の考えであろうし、究極なのかもしれません。源点として究極なところとして、地域が好きであることということと一度、皆さんのお住まいの地域、あるいはお勤めの町をどういう思いで普段見ているのかということの一度確認していただいて、その目で東北の今を見ていただければ、もっと歩み寄ったり、手練り寄せることができるのではないかと考えておりますので、1つお願いごとということで、最後、こういうことであります。

私の報告は以上で終わりたいと思えます。何かの参考になれば幸いです。

(会場から拍手)

(司会者)

友永さん、ありがとうございました。

行政の方で長いこと防災の担当をされてきたという、そういった思いが非常にひしひしと伝わってくる報告であったように思います。

若干時間がございますので、質問があれば受け付けますが、いかがでしょうか。よろしいですか。

ないようでしたら、どんどん進行していきたいと思えますが。

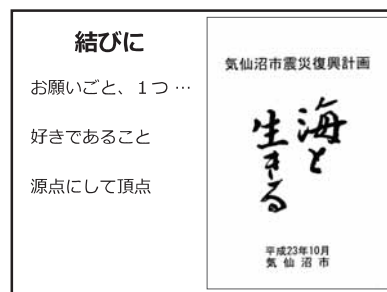
若干ここで、長丁場になりますので休憩を挟みたいと思えます。約10分、後ろの時計で40分まで休憩にしたいと思えますので、よろしくお願います。

(休憩)

(司会者)

次は被災体験報告ということす。

報告者の渡邊さんは、宮城県岩沼市にお住まいでご自身も被災をされました。岩沼市といいますと仙



台空港がある所で、震災当日、空港に津波が押し寄せてきて、車がたくさん流されるような映像を、大変な驚きをもって私たちも見た記憶がいまだに鮮明なのですが、そういった岩沼市より、市の震災復興会議委員として岩沼市の復興計画の策定にも当たられてきた渡邊美恵子さんよりご報告をいただきたいと思います。

渡邊さん、よろしくお願ひします。

被災体験報告

「住民の視線による復興計画策定へのかかわり」

宮城県岩沼市震災復興会議委員 渡邊 恵美子 氏

(渡邊氏)

あらためまして、こんにちは。

宮城県岩沼から今朝、ただいまお話がありました仙台空港から乗ってきました。仙台空港に行くまでの間、自宅から5～6分なのですけれども、今朝は道路がアイスバーンだったのですね。高知に降りましたら、何でしょうか、この暖かさということを実感しました。もう春はすぐそこまで来ているのかなと思いました。カレンダーでは立春ですよ。昨日は節分だったかと思うのですが、ここでやはり鬼は外、福は内、鬼役をされた方も随分いらっしゃるのかなと思います。

今日は、私自身の本当に当日の体験、そしてその後は復興計画に携わったということで、岩沼市のその簡単な内容を話します。あまり突っ込まれると、私も専門ではないのですけれども、概略的なものを皆さんに報告できたらいいなと思ひまして今日飛んでまいりました。ぜひよろしくお願ひいたします。

先ほどのお二方のように、きれいな写真、きれいというかその実態の写真もございませぬが、何か皆さんが描いていただけたらなと思ひます。

まず、岩沼といいますと、先ほどの空港は有名だと思ひのですけれども、なかなか規模的に映像、テレビ報道等であまり大きく、空港の部分しか映ってないのかなと思ひます。具体的にはその東部地区、中央部、西部地区と大きく分けることができるのですけれども、その東部地区。いわゆる私もそこに住んでおります。そういった所がすごく、先ほどの映像のような状態となりました。ということも含めまして、ご報告いたします。

皆さん、岩沼市とお隣の南国市が姉妹都市だということはご存じだったでしょうか。ずっと交流を深めていまして、古い歴史がありまして、行き来して交流しながらいろんなスポーツであったり、行ったり来たりしているということも併せて報告したいと思ひます。皆さん、お分りいただけていたのかなと思ひたのですが、ちょっと違ふと、やはりまだまだ行き届いてないなという思ひがありました。

岩沼は、国道4号線が中央部に走ってまして、常磐線に入る国道6号線のまた分岐点もありますので、非常に交通の利便性、または常磐線も、今は途中までなのですけれども、そういった形ですごく利便性に優れた町だということも併せてお伝えしたいと思ひます。

また、三大稲荷（いなり）と称しまして竹駒神社、皆さん行かれた方がいらっしゃるのかなと思ひのですけれども、その三大稲荷の竹駒神社も全国から皆さんいらっしゃって、参拝されているというのも特徴かなと思ひます。

そういった岩沼にも、津波は来ました。卒業シーズンで、私は地元で主任児童委員もしており、午前中に地域の中学校の卒業式に列席していました。とてもこぢんまりとした学校ですので、一人ひとりに卒業証書が手渡されて、子どもたちも、また地域の人たちも行き届いたとても穏やかな卒業式を迎えて、滞りなく自宅に帰りました。

私は、主人の両親と自分たち夫婦と、子ども2人の6人家族で、3世代同居です。東部地区に限りま

してはほとんど広い、どっちかという田畑が多いという地域なものですから、阿武隈河口ということで。そこで米作とか野菜とか、そういった地域で昔からの本当にいろんな名残、伝統などを重視した地域でした。そこで、やはり3世代というのは珍しくないのですね。そこで3世代過ごしていて、子どもたちはそれぞれ社会人で、うちから通勤しています。私自身もそうです。自宅におじいちゃんおばあちゃんの2人を残しまして、私もいろいろやぼ用、自分の用もいろいろありましたもので、出掛けていたのですね。

午後からちょっと隣町まで出掛けていまして、そしたら来ました。2時40分ぐらいにグラ、グラと来ましたのですけれども。そのときは「あらっ」と思った程度で、その前から、地震というのは非常に、その岩沼も含めてなんです、多かったですよね。「たいしたことないな」と思いながら、一步を車から踏み出したとたんに、すごい揺れが来たのです。皆さんも感じたかと思うのですが、本当にもう立ってられないほどの地震が、グラッと1回来て、「あっとうしよう」と思ったのですけど、それが3回来たのはご存じだったでしょうか。3回、揺れが大きく3分ほどの本当にもう立ってられないくらいの、自分自身も何かにつかまらなくちゃいけないというふうな形でつかまって、また、たまたまスーパーだったものですから、そのスーパーの中のものめっちゃくちゃという状況なのです。「もう、どうしよう。自分がけがしちゃいけない。このまま死んじゃうのではないかと、一瞬と思ったのですが、3分ほどの長い時間が過ぎまして、もう周りでは阿鼻叫喚（あびきょうかん）と言うのでしょうか、すごい叫び声が耳について、その様子というものは体験した者でないと分からないのかなと思うのです。いろんなガラスが割れる音、スーパーの棚からものが落ちる音、いろんなものが。自分が危ないと思ったので外に出たのです。外に出て、車までも行けない。その車の近くのもので、すごく散乱してきた。スーパーのスプリンクラーみたいなものが上部にありまして、そういったものから泡立ちのようなもの、水滴って白い泡みたいなものが出るのですね。そういったものが噴き出してきたという状況でした。

その中で何とかもう、「ここで終わりだ」と思いながら、ハラハラドキドキしながら、もうドキドキという程度ではなかったのですけれども。何と言ったらいいのでしょうか、もう駄目だ」と思いながら収まるのを待っていて、何とか落ち着いたところを見計らって、すぐさまわが家に吹っ飛んでいったのです。車で10分の位置にいたものですから、もう吹っ飛んで。その吹っ飛んでいく途中にも、信号がもう既に止まって、というかも動いてなかったのです。あれは不思議ですね。あちこちのマンホールだけが浮き出しているのですよね。ということは、やはり道路がもうかなり大きく状況的に大変なことになっているなと思いながら、危ないと思いつつも、もう家に着くのが必死ということを考えましたので、もうそんなことどうでもよかったのです。道を選びながら、必死の思いでわが家に到着したのですけれども、3世代暮らすような状況で、のどかな地域にある家ということで、無駄に広いのですよね。無駄に広いという言い方はおかしいのですけど。道路からわが家までちょっと入り込んで、門から庭をちょっと通っていくような状況の造りだったものですから、その途中にある灯籠は倒れて、中に入れない。

車を置いて、わが家の中に入ったら、もうスーパーの中の状況どころではなく、地震で、たんすは倒れ、もう、そのとき私は思ったのです。「たんすは地震対策してなかったな」と思いながら、これは反省点でした。めっちゃくちゃ、めっちゃくちゃ。食器棚は倒れる。どうしてこんな重いものが倒れるのだろうという状況の中に、おじいちゃんとおばあちゃんが外にいたんですね。腰も抜かしそうなくらいにびっくりして、足は裸足でした。慌てて逃げたということだったと思うのですね。83歳と82歳のおじいちゃん、おばあちゃんだったものですから、どうしていいか分からないという状況だったと思います。もう、私も顔を合わせるなり「大丈夫だった？」という言葉で精いっぱいだったのです。だから真っ青な顔で、何も言葉が出ない。もう本当に、何十年暮らしてきて、そういった状況が初めてだったというのは、その高齢者、おじいちゃんおばあちゃんの中では、もうどうしていいか分からなかったということでした。そういう状況の中で、私もあぜんといいました。「えっ、これ、どうしたらいいのだろう。何かから手を着けたらいいのだろう」。ただ、呆然と立ち尽くしているほかなかったのです。

そうこうしているうちに、車が入れないことに気が付きまして、途中で倒れている、その2メートル

50ぐらいある灯籠がちょっと道をふさいでしまったものですから、みんなでこれをどかさよということとで作業をやっていたのですが、なかなかその何百キロもあるような石なので、うまく動かない。どうしようか…。

そうこうしているうちに、3時40分ごろだったと思います。地震が2時46分ですよ。近所の自主防災の消防隊が、ひっきりなしに「津波だ、津波だ」と、そのころみんなに歩いて回っていたのです。そのころまで、行政の連絡というのは当然ないです。届きません。地域の消防団の皆さんが本当に必死で、「津波が来るから逃げろ」というふうな形で町内を回ってくれていました。私どもは今まで、そんな津波というのは、一昨年、チリ地震の絡みでいったん津波注意報が出たのですが、そのときは、注意は出たんですけども、大した高さがなかったということで事なきを得たのです。わが家は海岸線から3キロ弱ぐらいの位置付けにある所なのです。ですので、まさかここまで来るとは思わないですね。でも、何となく半信半疑でうろろしていたときに、うちの周りの側溝があるのですけれども、その側溝が急にじわじわと、実は水かさが増してきたのです。じわじわと、盛り上がるような状況で側溝が増してきた。「えっ？えっ？」と思いながら、「じゃあ取りあえず逃げよう」ということで、私と、たまたまた主人と、おばあちゃんとおじいちゃんということだったのですが、そのおじいちゃんが、やはり半信半疑だということで「おれは避難しない」という。そのすぐく何もかも散乱したわが家の中に残ったんですね。待っていると、私たちももしかしたらと思いましたが、置いてという言い方はおかしいですね。じいちゃんが家にいるということだったものですから、私たちは「じゃあ、行くよ」ということで、たまたま入れないのがラッキーだった車で逃げたのです。逃げたというか、近くの海岸線に並行して、数年前にバイパスとして出たちょっと小高い道路があるのですけれども、そこにちょっといて、様子を見ようということ。

自家用車で逃げたのですけれども、そこに着くやいなや、家の方を見ると、その道路との間に田んぼがあるんですけども、川のように、すごい、もう何と言うのでしょうか、真っ黒い固まりがどんどんどんどん流れてくるんですね。本当に私、ここ何年も生きてきまして津波というイメージは、皆さんもどうか分からないんですけども、普通に波が来るというイメージでとらえていたものですから、「何だ、この固まりは」という状況で、ただ、もう目をあぜんとして見ているほかなかったのです。どんどんどんどん、見る見るうちに、その田んぼの中に湖のように、いろんながれきを巻き込みながら、真っ黒い固まりでたまってきました。それで、「えっ？」と思いながら、どんどんどんどん見るほかなかったのですけれども、数時間たっても途絶えない。それが逆に、どんどんどんどん勢いを増していくのです。見る見るうちに、もううちに戻れないような水かさになってしまいました。その状況というのは本当に、今でも思い出すとぞっとするのですけれども。そういった状況の中で、一瞬、不安は自宅に置いてきた、そのおじいちゃんですね。「あらっ」と思いながらも、どうすることもできなかったのです。

多分数時間、どんどんその時間帯からしたらもう薄暗くなってきました。それで、どんどん寒くもなってきました。寒くなってきて、そういうときって、ガソリンが入ってないのに気が付くのです。だからガソリンを入れておけばよかったなというのは後から本当に、「後悔先に立たず」でした。エンジンを消すと寒い。しかし、つけるとどんどんガソリンがなくなるという間に置かれまして、着のみ着のままといった状況で来たものですから、もう何も、寒さも時折つけるエンジンで温めたという状況のまま、そこで一夜を過ごしました。

数時間この状態が続いたら、もしかしたらその場にいられない。その道路も冠水するのではないかということになりまして、何とか少しでも高い道路の所とへと移動しました。道路は平らではございませんので、少し高い所、高い所ということで移動しながら避難して、真っ暗のまま、本当にどんどんどんどん、何と言ったらいいのでしょうか、これは当事者じゃないと分からないというのですか、真っ暗な寒い中、どうしようもない状況で、どうしよう、わが家はどうなったのだろうなんていう思いをはせながらも、何もできない。それで、一緒にとみんなで同じように避難した人たちと口々に、もう、言葉が出ないのです。そうこうしながらも、時間がたつのを待つしかないということで、次の朝を迎えるほか

なかったのです。

明け方近くに、泊まっている、私たち地域の、どこに誰々がいるというのは分かりました。ふとトントンと窓をたたく音がしました。窓をたたく音でハッと気が付いたら、地域の方々が、「家に一人残してきたじいちゃんが大変なことになっているよ」という情報がありましたので、すぐ何とか行かなくてはと思いながら、水たまりの所を、主人と二人で行ったのです。そしたら冷たくなってしまっていたのです。

何でこんなことになったのだろうと思いながら、本人もやっぱり家にいると言いながら、立て続けに余震がありましたものですから、やはり怖い。本人的には本当に恐怖だったと思うのです。おそらく外に出たのですね。外に出たというところを、あの流れですから。83歳の老人の足では、とてもじゃないがそういった状況には太刀打ちできなかったのだなという状況でした。時間たってから、やっと行ける程度の水に勢いが止まりましたので、家に行きました。そしたら、やはりすごい状況でした。というのは、1階部分は水浸し。何と表現したらいいんでしょう。津波のイメージを私は払拭（ふっしょく）しなきゃいけないと思うのですが泥だらけなのです。数十センチも、家の中が見事に、きれいに泥だらけで、いろんなものが漂流していました。家の東側一帯が、後でご紹介いたしますけども、矢野目工業団地といいまして、ここ近年ずっといろんな工業が盛んになって、いろんな工場が入り込んでいる所でした。そういった所が逆に盾になって、根こそぎ流れてきた松がそこでシャットアウトされたのですね。水だけ来た。それを巻き込まないで流れだけ来たので、大きな漂流物というのはほんの、その手前の漂流物、例えばこの工場があった所の流れでいろんな、イオンもありましたので。まだ封を開けてないような商品的なものがいっぱい流れてきたのですね。そういう細かいものは流れてきたのですが、松は根こそぎでした。津波の威力というのはすごいと思いました。そういったものが工業団地で盾になりましたので、わが家は何とか、床上程度で済んだのだなというのは後から分かった。その時には、そんなことは思わず、「どうしよう、この状態」と本当に思って、おじいちゃんもそのような状況になったということで、正直言って、頭の中が真っ白になりました。

まず、何から手をつけていいのかわからない。そういう時って、私も初めての経験なのでよく分からないのですが、おじいちゃんについては警察の担当になるのですね。事故扱いということです。その間、安置される場所をお願いするということだったので、その間を利用しまして、何とか自宅の生活スペースなりを確保しなくちゃいけない。そのとき、避難所に行こうなどとは思わなかったのですね。というのは、2階ありましたものですから、何とか家は屋根が残った。じゃあ、何とかスペースだけは確保しようと思った。あと、長靴も全部流されて、どうにもならない。そうした時って、いろいろ生活の知恵というのですか、ビニールを履いて、本当にいろんなあの手この手で何とかしました。それで、最悪なことに水も出ない、電気もない。そんな状況のときは本当にどうしていいのかわからない。今まで文化的なとか、比較的何の不便もなかったような暮らしをしていて、いきなりそんな状況になったとき、人間って本当にあらためて普段の電気、水道のありがたさを感じるなあと思ったのです。まず泥を掃くしかなかった。外に掃き出す。何か無駄なことのような気がするのですが、「やらなくては」という思いで必死でした。

娘たち、息子たちは仙台に勤めていて、なかなか連絡も取れなかった。その当時は、実は携帯電話も本当につながらなかったのです。そんな状況も、最悪がずっと全部そろってしまったということもありまして、どうしよう。こんなとき、皆さんだったらどうするでしょう。近くの状況も飲みこめてない。とにかく、わが家しか今見えてないのですよね。それで、周りの状況は一体どうなったのだろう、どうしていいかわからない。

そんなときに、頼りはラジオだったと思います。ラジオは何とか使えるものがありました。緊急時はラジオと聞く。ここで、ラジオのありがたさが分かったと思います。ラジオを聞くことで一応、何が起きたのだということが少しずつ把握できました。先ほどおっしゃいました仙台空港の状況というもの、実は数日間、私たちは知ることができなかったのです。後日なのです。多分皆さんの方が、状況的には

早く知ることができたのかなと思いますけど、あれはすごかったですよ。

海岸線より少し入った所に伝統的な、昔から運河として利用されていました「貞山堀」というのがありますが、その貞山堀を境に海側の地帯がきれいになってしまいました。実は岩沼も、後から情報として、土台を残してきれいになって、松林ももう本当にばらばらというふうな状況になってしまった。見事としか言いようがないのですが、そういった状況になってしまったんですね。

岩沼市においても、全体で死者が150名。9月の時点では行方不明者が1名ということだったのですが、これは9月以降に引き取り手がいて、見つかったということが書いてありました。なので、現状の行方不明者はゼロということです。家屋の被害が全部で4,906戸という状況になりました。もちろん、その東部地区はほとんど農家を営んでいることが多いものですから、そういった被害農地につきましても9月の時点では1,240ヘクタール。岩沼の農地の48%ということは伺っていました。それが全部、塩害や津波によって浸水してしまったという、本当に今までに見ない、極めて甚大な被害だったということです。すごい状況ですよ。

そんな田んぼにつきましても、現状、本当に塩害などがひどくて、これからどうするのだという農家の方もいらっしゃるけれども、地盤沈下ということも、海拔ゼロメートル地帯がほとんど、その貞山堀を境に海拔ゼロメートル地帯になってしまいました。浸水はしたけれども、長く、長時間浸水しなかったよという農地につきましても、現状国からのあれもありまして、復興組合。結局、農家の方々が組織的に、JA中心になるのですけれども、復興組合というものをつくりまして、今、がれきの撤去なり除塩作業というふうな形で、現状進行しております。いろんな専門的な方からの意見も含めまして、除塩ということで、水を抜いて、入れて、を繰り返す形で、今作業中となっております。そういった所は、来年めどとしてやる方向だというのはちょっと耳にしたのですけれども、果たして、私自身の思うには「大丈夫なのかな？」というところがちょっと疑問に思う部分も多々あります。方向性としてはそうやって一歩ずつ進んでいるということも、併せてお知らせしておきたいなと思います。

先ほどもお知らせしました電気、水。私自身のあの地域につきましても、2週間以上も何もない状態でした。助けられたのは、やはり昔からの地域、農家もやっている地域も多いものですから、地下水ですね。地下水を持っていらっしゃるおうちが結構あるのです。そこから、市の水道はもちろん出ませんから、そこからくみ取って頂くというふうな、地域のそれぞれの本当にコミュニケーションを図りながら、普段はあまり意識しないことなんですけど、そういったときにすごく地域のつながりというものを実感することができました。食べ物等々も隣近所分け与えて、お互いに交流を持ってやるというのも、本当にそのときに、「そのときでないとできなかつたのかな。逆に、あって良かったのかな」と思うようになりました。

そんなこんなで何とかしのいで、そのおじいちゃんの方も何とかすることができて、やれやれと一息ついたころ、岩沼市としてはやはり「早急に復興計画を作らなければ」という声が発せられてきて、3月の震災後すごいスピーディーだと思うのですけれども、5月に関係者、有識者、学識経験者などさまざまな、本当にあらゆる経験者の方々がそろいまして、私自身その中で、被災者代表という形でかわることができました。その中でいろんなお話が出てきて、「こうなったら、岩沼を新しい町にしようじゃないか」ということと、その津波に対する思いですね。「津波が来ないように岸壁を造ったらいじゃないか」といういろんな意見もありましたけれども、「そういった津波を逆に緩和しようじゃないか」ということで、岩沼市として特徴をとらえた「千年希望の丘」という案が出されたのです。その千年希望の丘は、皆さんのお手元に配られたと思うのですけれども、この概要版の中で簡単に紹介しております。

5月にランドデザインという形でまず計画を立てまして、そのうちのまずやらなければならないというこの基本理念に臨みまして、リーディングプロジェクトということで、まず先にやらなきゃならないということが7項目取り上げられました。

まず、本当にいろんな仮設住宅ということを取り上げるのですけれども。まず岩沼の仮設住宅の在り

方なのですけれども、幸いなことに、海沿いで6集落が全部駄目になったのです。その6集落の人たちが地域のコミュニケーションをうまく図れるようにということで、仮設住宅につきましても非常にまとまった、集落単位で用意することができたということは、非常にこれは特徴的なことかなと思います。何地区、何地区、何地区の人たちが非常にその固まりを持って仮設で生活できるということがすごく、お互いに交流を持つことで今後の皆さんの人たちの支えになるのかなというふうなことで、すごく特徴ある。それで全員が、3カ所なのですが、その3カ所を全て近い所に建てられたということも、岩沼として非常に特徴あることだと思います。さらにはその仮設で暮らす皆さんが、心的に病んでいる方も、また高齢者もたくさんいらっしゃいます。その高齢者の方を支えるということでいち早く、近くに社協さんがあるのですけれども、その中にサポートセンターということで、仮設の人たちを支えるということで、非常にそういった部署も設けまして対応されているようなので。これは宮城県としていち早くされたということで、ニュース等々で話題になったことかと思えます。

さらには、今後、津波からの安全なまちづくりということで、その津波からの安全なまちづくりをするためにはどうしたらいいのか。浸水地域が多かったので、「減災」ということをひとつのキーワードにいたしまして、まずはいろんな地域の情報を聞きますと、東松島は、太平洋に面しているということですので被害が多かったですよね。と同時に、入り組んだ松島というのはすごくいろんな小島があるということで、比較的津波による被害が少なかったということは皆さんもご承知かと思うのです。そういったことを踏まえまして、じゃあ岩沼もそういった形で、もう家を建てられない東地区、もう皆さんなくなった所は住宅を建てないで、そういった松島的な島を設けて、それが島を幾つか設けるということで、それが千年希望の丘ということで、後々「ここに津波が来たのだよ」とか、そういったものが代々語り継がれていけばいいのかなという思いで、ランドデザインの中に盛り込まれております。

さらには、お話としてはその希望の丘を造るに当たっては、丘の中に出たがれき。ただ、専門的な先生の見解では危なくないがれき、要するに、コンクリートブロックとかそういったものを中に入れ込んで、それを土台にして、そこに丘として造っていかうではないかという提案なのです。というのは、この東地区に実は公園があったのです。海浜公園といいまして、小高い丘があって、東屋があって、広いグラウンドがあってという状況の丘があったのですけれども。津波のときに、その丘に上がって免れたと。ほんの寸前、そこまで波が来たのだよという。後日、そういった状況で助かった方がいらっしゃいますので、そういったことも含めてやはり希望の丘というふうな形で、方向性として考えているようですという言い方もおかしいのですが、ニュアンス。やはり今後、将来的にこういった希望の丘の上で子どもたちが遠足に来たらんとか、そういった思いで、そこでこんな津波があったのだよという、未来に向けた形の取り組みでもあるのかなと思います。

さらには、新しい、まだ国との絡みもあるようなのですけれども、「自然共生・国際医療産業都市の整備」ということで、空港も近いということもありまして、数々の医療機関が岩沼にできたらいいのではという研究する場所、もしくは、これは市独自とかそういったものではできませんので、国とのかかわりを持ちながら進めていけたらなということでした。

さらには、「自然エネルギーを活用した先端モデル都市」ということも大きく述べてあります。やはり今回、原発もそうなのですが、原発とかじゃなくて自然のエネルギー。太陽であったり、風であったりということで、そういった方向でもう今後は考えていくのが普通なのかなとか、これからの未来を考えるのにはそういった方向もなくてはならないのではないか、ということでした。

大まかには、あと文化的景観の保全と再生ということもありまして、この東地区に限り、昔からの「いぐね」というものがありました。うちうちを囲む、そういった「いぐね」が今回、漂流物を免れたという部分もありまして、そういったものも今後集団の中に、「いぐね」ということも取り入れていって、岩沼らしさというものも取り込んで、やはり代々景観的なものも造っていけたらなということで、話題としてはありました。

最近だと思えるのですけれども、国の方の農業についても何か動きがありまして、岩沼、名取、亶理な

ど4市だったと思うのですけれども、国の方の最先端農業という話も出ていまして、それは嬉しいニュースだなということも含めて、ちょっと情報としてお耳に入れておきたいと思います。

また、先ほど出ました東松島市と岩沼市が、国の戦略プロジェクトとあります。「環境未来都市」というものがあるのですけれども、それに選定されたということが、昨年（2011年）の暮れに発表になりました。まず環境未来都市というのは、国家プロジェクトの一つに位置付けられている政策だそうです。限られた都市、地域を環境未来都市として選定して、環境を超高齢化対策の面で成功事例を創出するとともに、国内外へ普及する展開ということで、岩沼市と東松島市が宮城県で選定されました。全国で11都市ということで、先日1月18日に野田首相（当時）から表彰されてきたということでした。これも併せて、ここでPRしておきたいなと思いました。

自分自身が今回、被災した中では、いい・悪いもないのですけれども、本当に全く家がなくなった方がほとんどなのですね。それと、屋根。今は津波なのですけども、地震で一番被害があったのが、岩沼の場合は瓦屋根でした。今でもなかなか追いつかなくて、まだまだブルーシートが掛かっている自宅とか、いろんな所で見えるのですけれども。屋根瓦はやっぱり重いのですよね。すごくやられているのですよ。あの規模の地震に、瓦はやはり重いですよ。その後、新たに造った所には軽い瓦をしていたお宅が目立ちます。いろんな所で回ってみますと、地震としての規模としては瓦。あと、道路ですね。やはりマンホールが飛び出したというのですか、地盤が浅かったというのですか。そういったところが大きく目立ちました。堤防も壊れまして、県と市の合同で7メートルクラスの堤防をやるということで、市長さんがそちらの方に伺ったようです。

本当に、被害が大きい先ほどの釜石、確かに岩手県。宮城でも揺り上げの運動もすごかったと思うのです。そういった大きな被害という所は情報として発信されていますが、そういった所でもネットとかをご覧いただけたらと思うのです。今はネット社会で、いろんな情報をどこからでも取り込めるし、いろんな状況の町やそういった所の情報収集等もできますので、いち早く本当に皆さん。私自身も、その岩沼の状況ということと、そういったものを少しでも皆さんに伝えられたらと思います。今日、ここでお話することになったのですよね。なかなか本当に皆さんの前でこうやってお話するという事は、慣れてない私にとっては勇気の要ることだと思うのです。少しでも分かっていたらなと思いました。何だか分かったような、分からないような状況だと思うのです。

「災害は忘れたころにやってくる」というのは、高知県出身の寺田寅彦先生のお言葉だと思いますが、まさしくこのとおりだと思います。災害の記憶とか教訓を、本当に時期がたつと忘れてしまうということではなくて、いろんな人につないでいく、また経験をつないで、教訓を忘れないように、さらに今回の被害を通して1人でも2人でも被害者を少なくできるのかなと思います。

自分自身、主任児童委員をやりながら学校の様子も聞くことができたのですが、実は、みんなで一時的に避難したよという学校が被災したのですよね。というのは、子どもたちは3月ですからいなかったと思うのですが、みんな地域の住民が小学校、玉浦小学校というのですけれども、そこに車で避難しました。避難したのですけれども、やはり海岸から2キロぐらいですが、たちまちその波に襲われて、避難したはずが、逆に助けを呼ぶというふうな状況があったわけなのです。ですので、その避難場所というもの今後ひとつの課題かなと私自身思っています。

もう1つ、中学校が斜め向かいの近い所にありまして、そこでも先ほど言った卒業式を終えた卒業生が、実はまだ学校に残っていたということもありまして、その卒業生につきましては親御さんたちと一緒にだったかもしれませんが、いろんな意味で避難するための教訓というものは、今後ポイントとして考えていかなければいけないということです。「地震だ」ということで海岸に向かって、おじいちゃんおばあちゃんが家にいるから、心配だからと迎えに行き、津波に遭ったよという方もいらっしゃいます。あと、地域で町内会長さんとか、消防団とか、そういった方々がみんなを避難させようとして誘導して、最後まで残って、結果的には亡くなってしまったというのもあるのです。実際、私の知っている方々がみんな亡くなってしまいました。それも、自分たちの仕事を果たしたと言えればそれまでなので

すが。やはり一番はじめにすることは、自分の身はまず自分で守る。そこからまず一歩進めて、行政なり何なりの対応があるのではと思います。私たちが、実は主任児童民生委員たちの教訓でもあるのですけれども、「人を助けに行くのは、まず二の次だよ」ということなのですね。これは何だか、良いようで悪い。相反するかもしれませんが、まずは、「自分の身は自分で守りましょう」と。「そこから一歩進めて、自分の体が大丈夫だったときにその方向に走ってください」ということは、耳にたこができるくらい最近言われることでした。津波というものに対する一人ひとりの、皆さんの避難意識さえ高めれば、被害の程度も少なく済むのかと、今回身をもって体験いたしました。

なかなか、岩沼の状況がまだまだ伝え切れないのですけれども、今後、このグランドデザインを基に具現化する方向として、私自身も少しずつでもかかわりを持ちながら、その未来へ向けた復興というものを見据えていけたらと思います。

最後になりますけれども、本当にここ数日間、全く話は変わってインフルエンザ等々がはやりだしておりますので、ご家族の皆さまやここにお集まりの皆さま、それぞれ健康に留意されるとともに、今後のご活躍をご祈念申し上げまして、簡単ではございますが終わりさせていただきたいと思っております。

ご清聴、ありがとうございました。

(会場から拍手)

(司会者)

渡邊さん、どうもありがとうございました。

渡邊さんとして本当につらい思いを話させてしまったような気持ちで、大変申し訳ないような気がいたします。

それで、三人の方の基調講演、そして2本の報告ということで、取りあえず本日、お話し申し上げる内容については以上になります。

あらためまして、3人のお話それぞれ出そろいましたので、ここで若干の質疑の時間を取りたいと思っておりますけれども。

もう少しここを聞きたい等々のご質問等があれば、ぜひお手を挙げていただいて。恐れ入りますが、所属と名前をおっしゃっていただいて、それでどなたへの質問なのかということを含めて、ご発言いただきたいと思っておりますけれども。

いかがでしょうか。

(参加者)

県議会議員の坂本です。

今日は三人の方のご報告を聞かせていただきまして、どうもありがとうございました。

後ほど、関先生がおまとめになられるときに触れていただいたらとも思うわけですが、結局、関先生のお話、あるいは友永さんのお話を聞いていて、今の被災地でどんな状況になっているのかなというところを、やはりあらためて感じさせられるわけです。

いろんな課題があって、先ほど友永さんが言われた次に進めないことへの弊害というか、いろんな意味で問題になっていくだろうと思います。とりわけ、例えば高台移転をはじめとしたまちづくりの復興計画とか、あるいは、その中でも土地利用規制の問題とか、いろんな意味で復旧・復興に向けての合意形成の困難性というのがあろうかと思うのです。そういう中で、復興が遅くなればなるほど、今度は町から流出していく人口も増えていくと。そういう中で、暮らしも町も復興が遅れてしまうというような、ある意味、悪循環的なことが起きてしまっているのではないかなというふうに思ったりもするわけです。

そういうことを考えたときに、友永さんが言われたすごくいい言葉だと思うのですが、「防波堤的災害感」と「沈下橋的災害感」。これをどういうふうに折り合いをつけながら、復興の加速化を図っ

ていくかということが必要ではないのかな。とりわけその中でも、やはり暮らしを再建していくためにも産業の振興というのはどうしても優先度合いは高いだろうというふうにも思いますし、そういったところをずっと被災地に入りながら、関先生がどういうふうを感じながら、例えば先ほどの気仙沼の光景などをお比べになったのかとか、そんなことを少し関連付けてお話しいただいたらなというふうに思います。

もう1点が、渡邊さんが言われました、岩沼の状況からのランドデザインの問題なのです。私も昨年（2011年）6月、仙台、石巻、気仙沼と行って、9月に福島県のいわきにも行きまして。明日、また石巻にも行くのですが。

そういう状況の中で、復興計画のランドデザインというのは、いわゆるハード整備の面だけなのかと、このランドデザインを見ていたら思うのですね。

その前段で、岩沼の情報を見ていたら、渡邊さんも入られておる協働のまちづくり指針というのが6月に立てられているわけです。私が違和感を持ったのは、それをまず検討していたかもしれないけれども、3.11を経て、6月にこの協働のまちづくり指針というのを出すことが果たしてどうなのだろうか。もっといろいろ議論して、ハード面での復興計画がランドデザインであるのだったら、ソフト面での復興計画がこの協働のまちづくり指針として示されるべきだったのではないかなというふうに、実は外から見て感じたわけです。

いくらハード面での復興がされたとしても、ソフト面で復興がなかったら、今後また、先ほどの話ではないですけども何か沈下橋の災害感が後退してしまうのではないかなと思ったりもしたものですから。その辺については、私なりにお聞きしたいなと思います。

よろしくお願いします。

（司会者）

ほかにございますか。

ないようでしたら、関先生が最後の総括をまとめの中でお話しいただき、先ほどの質問の回答を渡邊さん、お願いします。

（渡邊氏）

ただ今の質問です。

確かに、ランドデザインにつきましては、その会に参加して、ハード面だということの前提で提案しました。ソフト面はどうなっているのかという問いです。心のケア等、今後考えて下さいということも含めて、2本立てというのではないのですが、それは十分考慮した上で、ランドデザインがこれから向かおうということのまず第一歩なのだということで、その後に具現化した、ソフト面も含めた形も含めまして進めているということで行っております。

今出ました協働のまちづくりに携わってまして、震災前に提言書等も用意しました。市長さんに提案した後に震災がございました。（2月26日だったと思います）。震災に遭って、そのときは共同のまちづくりの指針ということで、岩沼にはまだサポートセンターというものがございませんので、そういった市民活動サポートセンターがあるものの、その案ということで2つほどを提案いたしました。その後に震災になってしまったということで、行政としても、いろんな意味で後回しにするほかないという実態なのだと思います。でも協働のまちづくりそのものは、今並行して、いろんな関わりを持ちながら進めております。内面下といったところです。「ここで終わり」ということではなくて、そういった形で何らか皆さんとつなげていく。いろんな団体、市になって、今、その市からの管轄ではなく、自分たちが中心となって、行政を絡まない形で、今一つの団体として取り組んでいまして、そこの中でできるだけつなげていこうではないかということで活動しております。皆さんの目につくまではまだまだ時間がかかると思いますけれども、これから徐々に、地道ではありますが、そういった協働のまちづく

りの中で本当に行政、もしくはいろんな団体と絡みながら、いろんなことを携えていけたらと思います。いまは進行形という形とさせていただければと思います。

以上です。

(司会者)

坂本さん、よろしいですか。

それでは、ほかに質問もないようですので、残り15分ほどありますが、先ほどの質問への回答も含めて、関先生の方からまとめという形でお願ひしたいと思います。よろしくお願ひします。

(関 氏)

私は今、岩手県の復興会議専門委員という仕事をやっています。岩手県は復興会議の委員そのものが県内の人だけで構成してまして、県外者の専門家が専門委員という形で参加するわけです。会議には出ない。随時、意見を申し上げたりする形の立場にあるのです。

それと、気仙沼市の復興会議の委員で、これは会議に出ながら意見を言って、復興会議にも多少の影響を与えるといひます。

それともう1つ、福島県の浪江町です。その復興会議もやってきているということで、今週から3つやらせていただひています。3点とも、そんな形でかわりながら見えています。

復興の流れが随分違うなと思ひています。とりわけ、岩手県と宮城県の違いというのがあるのですね。現象的には、岩手県が建築制限の区域を設定してないのです。宮城県は基本的に建築制限のエリアを設定してまして、制限があるために全く動かないということで、そういう不満が地元特に激しいのですね。

もう1つ、漁港についても岩手県と宮城県では、全然立場が違ひまして、宮城県の方が従前から漁協は1本なんです。県1漁協という格好になっています。岩手県は、漁協がそれぞれ単独でずらっと並んでいるという、もともとそういう構造なのです。

今回の被災後の対応についても、宮城県は漁港を集約化して、復活させる所とそうでない所を選別するとか、それから民間参入は認める方向に動くとか、そういうことをやっているのですね。他方、岩手の方はそういうことを一切しないと。「あなたの好きにやりなさい」ということもあって、恐らく全部の漁港を復活させる方向で自然に動かすという柔軟な対応の仕方です。宮城の方はある程度計画的、統制的なやり方をされています。

現実、その関係者の反応はどうかというと、岩手の方が早いですね。という感じがします。計画で枠を作っている所が意外と多くない。地元の思いがそのまま伝わるような形の、岩手の方が実は早いというのが、両方を見ていて感じますね。

宮城は伊達(だて)だと。すぐにトップダウン方式であるというやり方で、計画は作られるけどもなかなか、こういうケースがかえって逆に、現場では難しいということになっている。逆に、岩手は基本的に南部だという。実際、岩手の半分は旧伊達なのですけどね。とにかく、岩手は南部であるということで、どちらかという調和型であり、こういうケースはそういう形で進んでいくということで、まさに鈴木善幸さんスタイルですね。あの人は象徴的ですけども。そういうやり方でやっているということで、復興のプロセスも随分違うものだなというふうに、私には見えます。

それで、特に岩手から石巻ぐらひまででしょうか、岩手のリアス式海岸のゾーンと、渡邊さんの所の岩沼みたいに宮城県の平野部というのは随分違うんですね。特に石巻地区ぐらひ、北から女川ぐらひの範囲、あのあたりというのは条件不利地域なのです。要するに従来から人口減少、高齢化が際立つ地域でありまして、それが被災したということでもあります。そこでいろんな業種の方が「復旧・復興」という言い方をされるのだけど、「復興」という言葉がどうも抵抗が強いということなのです。いろんな方が、「これを機会に新しい町をつくりましょう」とか、「新しい産業を育成しましょう」という議論をさ

れる方もいらっしゃるのだけでも、それは現場に響かないということ。「この条件不利地域に新しい産業が興るのか」と、みんなそう思っているのですね。「それより、まず元の暮らしに戻りたい」というのが今後、特にそういう条件不利地域の現場の雰囲気です。その元の生活、元の暮らしに戻るために何をしていくのかということがどうも問われているのだということを痛感させられています。

さらに、市町村によって随分温度差があるということです。復興の度合いも随分違います。例えば、岩手県だけ見てみますと、先ほど申し上げた宮古が断トツに復興が進んでいるのですね。テンポが非常に速い。逆に、市役所の職員が相当数流出した陸前高田とか大槌あたりがほとんど動いてないということで、ものすごい落差が出てきているというのが現実なのです。

あの辺は私、今二通りだけお付き合いがありますので、いろいろ観察しに来るのですが、やはり宮古の場合早いというのは、人材育成が進んでしまったのですね。市役所の人材育成の進み方がまるで違っていました。

実際、私もずっとその現場に立ち合いながら宮古で付き合いしてきたのですが、こんなことがあったのですね。ちょうど13年ぐらい前、97年に市長さんが代わられたのです。代わられまして、お医者さんが市長になられまして、熊坂さんという有名な方ですけれども、彼が市長になったのです。97年に初めてお邪魔したときに、現場を一通り回りました。「県庁から行ってくれ」と言われて現地入りしたのですが、担当の若い人がずっと私を案内してくれまして、3、4日ずっと回ったのですね。非常に熱心な人でした。帰り際に市長と話をしたのですが、「私は医者出身だから、政策の中心は福祉です。ただ自分も青年会議所の議長もやったことがあるし、ただ「福祉福祉」と騒いでもどうにもならない。福祉を十分にやるためには経済力が必要である。経済力の基盤が産業である。だから私は「福祉と産業政策の2本立てだ」ということで、彼は立候補して市長になられた方です。この条件不利地域で産業振興をやられるのですねと言いました。

「どういうふうになればいいですか」と言うから、「やっぱり産業担当、特に地元の企業との信頼関係が一番重要ですよ。そのためにはまず、「産業担者を3年、5年で代えてはいけません」「10年ぐらい置かないと駄目です」「そうしないとコミュニケーションが取れないから、まあ10年置いてください」と言ったら、そのとき市長は「いや、困った。選挙の関係で4年は保証できる」という。その後選挙がありますから、4年は保証できますけどねという話で終わったのです。以来、私はずっと関わって、彼を指導していました。それは佐藤日出海さんという人です。才能もあります。熱心で才能もあって、産業振興をしっかりとやっていました。ですから、地元の信頼が非常に深くなっていたのです。その結果、今でもやっているのです。15年目になるでしょうか。97年ですから、15年選手なのです。役所というのは人事異動しなければ出世しないという仕組みになっているらしくて、人事の方が盛んに佐藤さんを出世させるために異動させたいという案件が挙がってくるたび全部市長が握りつぶしていたというのです。握りつぶして、彼をずっと産業担当に育ててきたというわけです。その握りつぶす理由をその後言われたのです、何と、私との約束だと言われました。そういう形で、この十数年育てられた佐藤日出海さんという人がいます。被災後、新しい市長になったのですが、その市長も繰り返しているらしくて、被災後2週間で現職に戻れということで戻して、それから彼の部隊が、もともと信頼関係が結成されている業者に走り回って、情報収集してやるべきことを整理して推進していったということが産業復興のきっかけになって、あの並びの市町村の中では群を抜いているということになります。

そういうことで、いろいろとやっているのですが、新しく産業を興すということは、すごく美しく、希望に満ちた言葉なのですが、なかなか難しいのが現実です。我々はどんなことを推進していくかということ、新しく誘致するなどというのは、戦後の話だ。それは必要なことかもしれないけども、これまであった企業を逃さないようにしましょう。何とかやってもら、継続してもらということに最大の力を注ぐべきでしょう」ということでやっています。先ほどの映像でご覧に入れた郵便ポストですが、郵便屋さんがかがりついで信頼関係の中で土地を探し、いろんな制度を提供して、残ってもらったということなんです。

そうやって始まりますと、働いている方にお話を聞くと、「本当に良かった」と言うのですね。そういう場があって本当に良かった。どうしていいか分からなかったということで、流出するかもしれない人たちがそこで、現地で働いていられるということで、地道な平時の取り組みが、被災後に重大な影響を与えるのだなという観点から、各市町村の在り方をぜひ考えていってほしいと思います。

その中で、最近興味深い動きがありますので、1つ教えておきたいのですが、地域間連携というものでして、私は先ほど「近くの異業種、遠くの間業種」というお話を申し上げました。市町村の間でも、そういう関係はすごく重要だなと思います。最近思ったのですが、やっぱり力のある自治体は違うなと思ったのですが、岩手県の北上市というのがあります。北上は非常に岩手の集積が進んでいく日本で珍しい所なのでですね。人口もこの10年間に8万3,000人から9万4,000人になっているのです。県庁所在地の隣だったらそういうことはあるのだけど、離れている所でそういうことが起こっているのは日本中どこにもないのですね。そのぐらい、実は底力があるという町です。

そこがどういうふうな格好になっているかという、今、北上市は釜石と大槌を支援するという立場を明言しまして、今何をやっているかという、緊急雇用の制度がありますね。緊急雇用の制度で大槌と釜石、それぞれ100人ずつ提供しています。大槌に100人、釜石に100人提供しまして、予算は一応3月までです。何をやっているかという、仮設住宅で元気のいい人たちを100人ピックアップして、緊急雇用の対象にしているのです。彼らが、仮設住宅の見守り役です。それを北上が負担している。そうすると、元気な人に100人分、そこに月15万円の給料を払って、そしてその管轄の一定の被災者住宅の見守り役や声掛け役とか、そういうことをやるなどということ、北上がやっていますよという格好です。

さらに、現在沿岸部から大陸への避難というか移転が起って行く。まだ仮設的な工場ですが、その従業員3人を緊急雇用にして、北上市が負担しているということです。4月から今度、本格的な工場が始まるのです。釜石の企業が北上に来て、14億円かけて、それで工場が3月にできて、4月からスタートする。この企業について、従業員10人分を緊急雇用の対象として10人分の、月20万円。年間240万ですか。ですから、全体2,400万円を北上市が負担するという形を自力です。それは1年間なのですが、来年の4月以降は3年間。県に提案して、それを実現させたのです。ですから、2013年の4月から3年間を正規雇用に切り替えるという形を提案しまして、3年間で一人当たり225万円の賃金を負担して、1社当たり最大1億円のそういう事業を市が負担するところと、プラス県にそういう点を推して、県も合意したということです。そのような連携の仕方、支援の仕方をやっているということで、さすがにやはり力のある自治体は違うのだなと思いつつ見ましたところでもあります。

そんなこともあるのですが、いずれにしても先ほど指摘ありましたように、なかなかこういうケースで難しい部分もある。特に、原発地域のあたりは大変難しいということでありまして、今後もどうなるか分からないということでもあります。

たまたま先日、浪江で18歳以上の全町民に対するアンケートをやりました。多分、これまでいろんなあちこちでアンケートをやったのですが、これが一番系統的だったと思うのです。従来のアンケートは男性の人からなのです。そうではなくて、女性も含めた方がいいということで18歳以上全部やりまして、1万6,000人ぐらいを対象にやって6割が返ってきたという、すごいアンケートがあるのですが、これはネットで見えます。それで、最重要の質問項目は何かというと、「戻りますか？戻りませんか？」という質問なのです。そしたら、36%が「戻らない」と。特に20代、30代の女性は6割が「戻らない」という数字が出まして、町長の反応が「驚きを隠せない」という発言でありました。そういう枠組みの中で復興を進めていかなければいけないという、大変難しい問題です。特に、事業者にとっては人口が減るということは事業になりませんので、さて、どうしたものかということで、予算判断できないというのが現実です。

中でも、既に先ほど紹介したように、被災地で事業を始められている方たちがいらっしゃる、さてどうするというと1つのパターンは、多分ここで始めた以上、10年やめられないということと、自分は戻りたい。だから2拠点でやる。それを執行したいという方もいれば、「そうじゃない」これは飲

み屋のおばさんだったのですが、60歳の飲み屋の人で、二本松の駅前で復活しました。

それで大変参考になったのですが、要するに空き店舗を借りて、内装を変えてスタートしたのですが、700万掛かってお金がない。それで、銀行に行ったけど相手にしてくれない。60歳の女性で、相手にしてくれない。ところが、福島県と経産省が合意した特例がありまして、3,000万円まで無利子、5年据え置き、20年返済というのがあるのです。これは島の原子炉の被災地だけです。その対象になりまして、彼女は700万円借りてしまったわけです。彼女自身、その飲み屋をやる前は金融機関に勤めていまして、借金ということを知っているわけですね。彼女いわく、「20年というのは、私は80歳よ」と。80歳になる人に貸したということで、あり得ないということが実際起きているわけで。だから本人は「80歳まで頑張ります」ということです。

ただし、最近になって助成が進み始めました。近いうちに、役場と市街地の人たちは戻るという雰囲気なのです。そういう住民に対して彼女いわく、「二本松の周辺には浪江の人は4,000人いる。それで飲み屋を11月から始めて、お客さんはいっぱいいるのだけど、帰られたらどうしよう」「私、どうしたらいいのかしら。帰られたら、お客さんがいなくなる」といって、浪江の店を始めようとする、「また相当改装費が掛かる」「どうしていいか分からない」と言うんです。これが、1つになった動きということですね。先ほどみたいに、2拠点でやりましょうという認識を持っている方と、それから、帰りたくても帰れようがないということで揺れているというのが、現地の事業者の状況でありまして。私の方は産業系を対象にして見ていますけども、そういう人たちと寄り添いながら、うまい着地点を探していく必要があるなと思っているのです。

それ以上に重要なことは、今、ああいう所というのは先ほど申し上げましたように乱雑にしていくと事業者意識が低下していくと。このあたりが一番心配でして、何とか被災地でも事業を起こして仕事をしていくということが、多分復興の基本的な精神ではないかなと思っています。

先ほど紹介したそば屋のおじさんは、「仕事は力だ」と言っていますよね。復活した人はそういうことを言っていて、そういう気持ちが持続できること、失わないことが、多分復興への基本だろうと思っています。これはずっと現場で、個々に携わるしかないですけども、仕事をしながらそういう気持ちを失わないように参加していきたいというふうに思っています。本当にこういうケースは難しいし、みんないろんな方向に向いていますので、あるいは、全然向かない人もいますからね。そういう枠組みの中で、何とかうまく事業を始められて、雇用など地元の方が確保できていくということが、復興のひとつの非常な側面ではないかなと思っています。

そんなところです。

(会場から拍手)

(司会者)

ありがとうございました。

本当に南海大地震が来るぞということを想定すると、高知のまちづくり、また災害に備えた準備ということで、大変いろんな多くのヒントが出されたというふうに思います。

今日が第1回のシンポジウムですから、次回の第2回の時期や内容は未定ですけども、今日とは違う切り口で第2回の設定をしまして、またご案内をさせていただきたいというふうに思いますので、よろしく願います。

最後に、今日、基調講演をやっていただいた関先生、そして報告していただいた友永さん、渡邊さん。お三人に全体の拍手でお礼に代えたいと思います。

(会場から拍手)

それでは、以上でシンポジウムを終わります。

どうもお疲れさまでした。ありがとうございました。